

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十四）

鈴木 満 訳・注

*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をDSBとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig, Verlag von Georg Wigand. 1853. Reprint. Nabu Press.

初版リプリント。因みに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をDSとする）を参照した場合、次の版を使用。

Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München, Winkler Verlag. 1981. Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

因みに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版（略称をGLとする）も参照した。

The German Legends of the Brothers Grimm. Vol.1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human

Issues, Philadelphia, 1981.

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合はここに記さず、本文に注番号を附し、「DS***に詳しい」と注記するに留める。
5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。
6. 語られている事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があるうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といったご高教を賜ることができれば、まことに幸いである。
7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。
8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その一)	一	六〇	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第一・二号	一七〇二三五ページ、平成二十四年十一月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その二)	六一	九〇	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第三号	四六三〇五三〇ページ、平成二十五年二月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その三)	九一	一三四	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第四号	七五〇一七六ページ、平成二十五年三月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その四)	一三五	一八四	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第一・二号	一五七〇二八五ページ、平成二十五年十一月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その五)	一八五	二二五	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第三・四号	九五〇一八〇ページ、平成二十六年三月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その六)	二二六	二八八	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第一号	二〇九〇三三〇ページ、平成二十六年十月
『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その七)	二八九	三三九	所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第二号	

- 一五一～二四六ページ、平成二十六年十二月
- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その八） 三四〇—— 三九四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第三・四号
 一～九八ページ、平成二十七年三月
- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その九） 三九五—— 四四四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第三・四号
 九九～一九六ページ、平成二十七年三月
- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十） 四四五—— 四八四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七卷第一号
 八三～一七八ページ、平成二十七年十二月
- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十一） 四八五—— 五四四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七卷第二号
 五五～一五六ページ、平成二十八年三月
- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十二） 五四五—— 六〇九 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十七卷第三・四号
 一～一〇九ページ、平成二十八年三月
- 『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十三） 六一〇—— 六五九 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十八卷第一号
 二九～一二九ページ、平成二十八年十一月

*本分載試訳（その十四）の伝説

- 六六〇 子ぶもの予言 Des Kindes Weissagung.
- 六六一 戻って来る自殺者 Rückkehrender Selbstmörder.
- 六六二 赤い獅子 ^{ア・ロート・ライオン} Der rote Leu. *DS99. Die Fundgrübler.
- 六六三 クッテンベルクの三鉱夫 Die drei Bergleute im Kutenberg. *DSL. Die drei Bergleute im Kutenberg.
- 六六四 山の王 Der König im Berge. *DS25. Der verzauberte König zu Schildleib.
- 六六五 溺死者たちの魂 Die Seelen der Ertrunkenen. *DS52. Der Wassermann und der Bauer. / *DS53.

Der Wassermann an der Fischerbank.

六六六 ヘルフェンシユタイン城ドニツェン Das Weinfäß im Helfenstein. *DS107. Der Helfenstein.

六六七 石の新床イシノイダ Das steinerne Brautbette. *DS230. Das steinerne Brautbett.

六六八 悪魔の腰アクマノウシ Der Teufelsrachen.

六六九 金貨鼠オウギ Die Goldmaus. *DS333. Der Krämer und die Maus.

六七〇 チェヒとレニ兄弟 Die Brüder Czech und Lech.

六七一 クロクとその娘たち Krok und seine Töchter.

六七二 リブッサ Libussa.

六七三 鉄の卓子テール Der eiserne Tisch.

六七四 プラガ Praga.

六七五 リブッサの沐浴場オムヘンコナ Libussa's Bad.

六七六 リブッサの寝台 Libussa's Bette.

六七七 ヴィシェラトの悪魔の柱 Die Teufelssäule auf dem Wischerad.

六七八 ドラホミーラの柱 Die Säule der Drahomira.

六七九 プラーク橋とその象徴 Die Prager Brücke und ihre Wahrzeichen.

六八〇 ボヘミアのアダム派 Adamiten in Böhmen.

六八一 犬の洗礼 Hundetaufe.

六八二 臭い爆弾 Stinkende Bomben.

- 六八三 聖なる土 Die heilige Erde.
- 六八四 ザールの修道士たち Die Mönche von Saar.
- 六八五 ブーデチュの黒魔術学校 Die schwarze Schule zu Budecz.
- 六八六 ザーツに迫る亡霊の軍勢 Geisterheer vor Saaz.
- 六八七 ズアターボル山の異教徒の墓 Das Heidengrab auf dem Sutabor.
- 六八八 麵麴の靴と小型丸白麵麴の靴 Brotschuh und Semmelschuh. *DS238. Die Brotschuh. / *DS236.
- Die Semmelschuh.
- 六八九 呪われた城伯 Der verwünschte Burggraf.
- 六九〇 郷士ルートヴィヒ Junker Ludwig. *DS286. Der verrückte Grenzstein.
- 六九一 ハンス・ハイリングの巖 Hans Heilings-Felsen. *DS329. Hans Heilings Felsen.
- 六九二 ツアイテルモースの森 Wald Zeitelmoos. *DS46. Zeitelmoos.
- 六九三 ブッツェンロイトの夜の獵師 Der Nachtjäger im Butzenreut.
- 六九四 ナイラ村近くの小人の洞窟 Zwergenhöhle bei Naila. *DS34. Zwerge leihen Brot.
- 六九五 主なる神の巖 Der Herrgottstein.
- 六九六 フィヒテル山とフィヒテル湖 Fichtelberg und Fichtelsee.
- 六九七 ルーフス城の財宝 Schätze der Luchsburg.
- 六九八 牡牛の頭山麓の亡霊教会 Geisterkirche am Ochsenkopf.
- 六九九 ルードルフシュタイン城の地獄 Die Hölle auf dem Rudolphstein.

- 七〇〇 ヴァルトシュタイン城の煉瓦^{れんが} Der Ziegel vom Waldstein.
七〇一 ヴァイスドルフの鑓目^{かじめ}立て職人 Der Feilenhauer von Weisdorf.
七〇二 キンコン小鐘^{キンメルツラッポヘン} Das Bimmelglöckchen.
七〇三 いなくなつた子^こ Das verlorene Kind.
七〇四 静かな草原^{ダイ・シムテイレ・グーゼ} Die stille Wiese.
七〇五 異教の町とウィーテの洞窟^{ハイルンツェラド} Heidenstadt und White-Höhle.
七〇六 エッペラ・ガイラ Eppela Geila. *DS130. Eppela Gaila.
七〇七 フランケンタールの見霊者 Der Seher im Frankenthal.
七〇八 ポーデйка姫 Fräulein Podika.
七〇九 羊飼いの綱 Das Seil des Schäfers.

六六〇 子どもの予言

アイファース村^{ドルフ}のその名も高き科^{リンデン}の木の樹上に住んでいた巫女^{シレーヤ}がトルコ軍について予言したように、一二五四年のこと⁽¹⁾、ポーランドの国はクラカウなる生後半年の子どもにこんなことが起こった。この子が口を利き始め、タール人（モンゴル人）の襲来を予言したので、だれもが驚愕^{きょうがく}し、訝^{いふか}しんだ。そして子どもの予言は恐ろしくも的中、タール人はこの国に侵入し、剣と火をもつて荒廃させ、リーゼンゲビルゲ⁽²⁾の麓^{ふもと}、シレジア、ボヘミアにまで迫った。プレスラウ——彼らはこの都市をも焼き払った——ではチェスラウ聖者⁽³⁾の祈りに応じ天から火がモンゴル人どもの陣営に下ったので、彼らは撤退した。ヴァールシュタット近郊でタール軍と血みどろの会戦が行われ、三千のキリスト教徒兵が戦場に斃^{たお}れ、切り取られたキリスト教徒の耳——戦死者一人につき一個——が九つの袋一杯になった。無数の捕虜が連れ去られ、その中には二万一千もの乙女がいた。子どもは、自分自身残酷なタール兵に首を刎^はねられるだろう、と予言したが、これもその通りになった。

六六一 戻って来る自殺者

シレジアの人に知られたある都市でのこと。グルゲルという靴匠^がが自ら喉^{のど}を切つて死んだ。死者の寡婦^{かふ}とその姉妹たちは仰天し、汚名を避けるためこの自殺⁽⁴⁾を秘し隠し、証拠を見せまいと遺骸^{いがい}を屍衣^{しがい}でしつかり包み、かつては律儀で非の打ち所がなかった男の死に方が外へ洩れないようにした。立派な葬儀が厳かに執り行われ、大勢の人が

心を籠めて死者を悼んだ。けれども六週間後、靴匠の死に方はまともではなかっただけでなく、その姿が今も目撃される、という噂が町に流れた。これは本当のことだった。男は白昼にも夜にも出沒し、眠っている人たちに覆い被さった。——つまり吸血鬼になってしまったのだ。ために大恐慌が起こり、独りで寝る者はもはやいなくなつた。皆だれか伴侶を選んで一緒に臥せつたが、これといつても役立つたわけではない。亡霊の災禍は七箇月目に入つても続いた。靴匠が死んだのは一五九一年九月二十日だったが、一五九二年四月十八日、市参事会は夜の十一時にその墓を開かせた。靴匠の屍骸はまだ生生しく、その頸の傷口から出血していた。屍骸は六日間に亘つて晒し者にされ、寡婦とその姉妹たちには厳しい審問が行われた。それから市参事会は、屍骸は埋葬し直し、その場所は汚辱の地とする、との命令を出した。これは実行されたが、何の効果もなかった。吸血鬼は再三再四戻つて来たからである。そこでまたしても墓が掘り返され、屍骸は完全に焼却され、遺灰は川に撒き散らされた。吸血鬼はこの処置がお気に召さなかつたに違いない。なにしろ以来戻つて来ることはなかつたので。

六六二 赤い獅子

グラーツとシュヴァイドニッツの間に鉾脈に富んだ梟山地が突元として連なっている。ボヘミア側のある採鉾場で一人の鉾夫が働いており、赤い獅子と呼ばれていた。この男はかねてから独立の採掘権認可を受けており、自前で仕事をしていた。しかし最初の内はまるきり運に恵まれなかつた。なにせありつたけの財産を採鉾で磨つてしまひ、最後には妻の持参金もそっくり注ぎ込み、彼女は面紗すら売らねばならない始末だった。ところがある日のこと、坑内の夫に弁当を届けに来た妻は大きな露頭（露出した巖塊）にしたたかに踵をぶつけ、血の出る怪我をし

た。そこで夫が道具を手に取り、こいつを掘り取ろうとしたところ、うわあ、露頭がピカピカ燦めいた。純金だったのである。間もなく妻は血だらけの踵のお蔭で極上の面紗ヴェールを手に入れたし、失くした物を何千倍にもして取り戻した。そこで彼女は傲慢不遜にも「主なる神様だつて、あたしをまた貧乏にすることはおできにならないわ」と放言するに至った。赤い獅子は大層畏敬される男になり、広くその名を知られ喧伝された。ボヘミア王ヴェンツェル（10）の臨御を仰いだこともある。その際王は忝なくも赤い獅子から丸丸一噸（11）もの黄金をご嘉納あそばされた。また赤い獅子はヴェンツェルの父君である皇帝カール四世に騎兵百騎分に当たる完全装備の馬匹ばひつと甲冑かちゅうを献上したこともある。自分と妻は絢爛豪華な装いを凝らし、その邸宅は快適を極め、邸内のどこもかしこも金・銀・絹で光り輝いていた。当時錬金術がまた復活してせつせと行われ始めていたが、錬金術師たちは彼らが作り出そうと努めている神秘的な純金を、この成功した富裕な黄金発見者を讃えて、赤い獅子と呼んだのである。しかし高慢・虚栄に加うるに、妻の道理に外れた思い上がりと瀆神とくじんのせいで、さしもの赤い「華やかな」栄光も急速に終焉を迎えた。金鉱脈が突然尽きた上、貯えは何もなかったもので、とどのつまり妻の面紗はまたもや飛び去り、赤い獅子は物乞いをするほど落ちぶれ、妻ともどもひどく惨めな死に方をした。物乞いをするほど落ちぶれるというのは、赤い獅子「黄金」が出現しますように、と不毛の望みに身を窶やつした夥しい錬金術師たちに降り掛かった運命でもあった。

六六三 クッテンベルクの三鉱夫

ボヘミアの邦にまことに名高い採鉱場がある。これはクッテン山ベルク山中に存在。ここですの昔こんなことが起こった。三人の鉱夫が毎年同じ坑道で一緒に働き、生計を立てていた。毎日入坑する時持つて行くのは祈禱書が一冊、

坑内灯に使う一日分の油、それからこれまた一日分だけの食糧で、連れ立って坑道に入り、切羽きりばに行くのだった。ある日突然坑道が埋まった。鉱夫たちは神様に身をお任せして「何もはやすすべもなく」、これで死ぬのだと思った。なにしろ油も食糧もたった一日分しかなかったからだ。けれども三人が一緒に唱えたお祈りはずつとずつと効き目があり、灯油は尽きることなく、食糧も無くならなかった。彼らは山の胎内で祈り続け、働き続け、何年も何年も経って行くのが分からなかった。七年が過ぎ去ったが、普通の一週間ほどとも思えなかった。ただ髭ひげと髪がひどく伸びたので、刻ときがどんどん流れていることには気付いた。家に残された妻たちは夫が三人ながら山の中に埋まってしまったことを知り、そのうちとうとう、求婚されたらまただれかに連れ添おうと考えるようになった。ある時三人の鉱夫は、どうしても縦坑たてあなから光の射すところへ出たい、と焦れ始めた。穴蔵の植物が渴望に蒼腿あせづめた蔓つるを光のある場所まで高く這はい上がらせ、緑になり果おせたがるように。三人の一人が溜息をついて心の底から言った。「ああ、もう一度、もう一度だけ、日の光を楽しみてえなあ。そうしたらまあ死んでもええ」。二人目がいじみ言言った。「ああ、もう一度可愛い女房と一緒に飯を喰くいてえ。もう一度だけ坑あなから出て楽しみてえ。そうしたらまあ死んでもええ」。三人目が嘆息した。「ああ、一年だけでも坑の外に出て女房の傍でのんびり暮らしてえ。そうして絶対坑内にやあ下りねえんだ。そうできさえしたら、娑婆しやばよ、おさらばだ、って言ってやるのによう」。こう彼らが願うと、山が真つ二つになるかのような恐ろしい音がして裂け目ができ、できた裂け目から青天の輝きが深い坑の底まで射し込んだ。そこで三人はそこまで攀よじ登り、一番目の男が裂け目から暖かな陽光の許もとへ這い出してうつとりと深呼吸し、温かい陽射ひざしを浴び、嬉しがって叫んだ。「ああ、日の光、神様の光」。——そしてがっくりくずおれて死んだ。他の二人も裂け目から這い出し、住んでいた村へと歩いて行き、妻を探した。妻たちは彼らだれだか分からなかった。なにしろ二人ともまるで森の精ゴースト・レニョットみたい「に髭も髪もじゃもじゃ」だったから。で、寄

せつけようとしなかったが、男たちは、剃刀と石鹼（かみそり せっけん）をくれ、と言い、髭を剃り髪を梳（くし）つてから妻たちの前に現れた。今度は二人とも体を洗い、髪に櫛（くし）を入れてあったので、妻たちは夫と再会できたのを喜んだ。二番目の男の妻はすぐに腕を振るってご馳走を作り、夫婦差し向かいで食べたり飲んだりして楽しんだ。食後夫が夕べの祈りを捧げ、飲み物・食べ物をお恵みくださったことを神様に感謝すると、がつくりくずおれて死んだ。けれども三番目の男はなお丸一年この世の暮らしを楽しめたし、もはや縦坑に下りることはなかった。この鉦夫がクッテンベルクから生還して丁度一年が過ぎると、彼は妻を抱き締めて言った。「達者でな。天国でまた逢おう」。「ああ、あたしも連れてって」と妻は応え、二人が愛の切なさ（もた）に悶え、信実を籠めて（まこと）縋り合っていると、永遠の眠りが二人を抱擁した。——クッテンベルクには小人たちもいる。ボヘミア人は家の鍛冶屋（ハウス・シュミットライン）小人と呼んでいる。小人たちは掘ったり、鉋を振るったり、鍛えたり、叩いたりする。しげしげ鉦夫らをおちよくり、ろくでなしや罵詈雑言を吐く輩を懲らしめる。

六六四 山の王

ドイツ・ボヘミア山地（ゲゼルゲ）中にかつて古城シルトハイスがあつた。これが改築・改装されることになった折、壁工と人夫たちは城の基部に通路と穴蔵が数多くあるのを発見したそう。その一つで象牙の肘掛け椅子に王が腰を下ろして眠り、その傍らに姫が身じろぎもせず立ち、王の頭を支えていた。人夫たちが好奇心に駆られ、この幻影にもっと近づくと、姫は不意に蛇に変身、激しい焰と煙を吐いたので、彼らはたじたと後ずさった。このことを注進された城主は自身穴蔵に降りて行き、姫が悲痛な溜息をつくのを見た。城主は扉を開いて中に足を踏み入れ

たが、焰と煙は彼にも噴き付けられた。しかし愛犬が勇敢に突っ走って行ったし、城主も愛犬に後れを取りたくはなかった。「煙が薄らぎ」姫の姿が目に入ると、犬は怪我もせずその腕に抱かれていた。しかし壁には焰に包まれ灼熱の光を放つ火の文字で、身を滅ぼすことなかれ、と警告が記された札が掛かっていた。それに頓着せず若き騎士が更に進むと、焰に取り巻かれ、焰に吞み尽くされた。

六六五 溺死者たちの魂

ボヘミアの邦のある湖に緑色の帽子を被っている男の水の精が棲んでいた。唇を閉めることができなかったの
で、精を見た者は緑色の齒を剥き出しているのも分かった。それ以外は人間と全く区別が付かなかった。精は湖畔
に坐って緑色の布紐を際限もなく水の中から引つ張り出してこれを測っているのをしばしば娘たちに見られた。充
分測ると精はその布紐を娘たちに投げてよこした。この男の水の精は湖畔に住んでいるある農夫と昵懇になり、よ
くその家にやって来たし、湖底の自分の棲処にお客に来るよう農夫を招きもした。農夫が訪ねてみると、湖底の家
はとてつもなく素晴らしく、財宝がたくさんあった。最後に小さな一部屋に入ると、新しい壺が夥しく並んでいた
が、全部逆さまになっていた。「こりや一体何するもんだね」と農夫が訊くと、水の精が答えていわく「話してや
ろう。毎年わしは人間を一人湖に引きずり込む。するとその魂はわしのものになる。で、わしはそれを壺に封じて
しまつとく。どんな男にもこの世の楽しみ事がある。男の水の精だつて同じこつた。これが今わしの道楽だて」。
農夫は、こんな楽しみはけしからん、と思い、腹が立つて堪らず、気が気でならなかった。一方彼は湖中への行き
方によく目を配っていた。径路はとある井戸小屋を通るものだった。ある日の昼食時あの修道士〔¹⁶水の水の精〕が湖

畔に坐つて布紐を測り、それを娘たちに投げ与えているのを見掛けた農夫は、急いでこっそり水の精の棲処に忍び込み、壺を悉く引つ繰り返した。うわあ、もう大喜び、水の精の蒐集から解放された魂たちは天国へふわふわ昇って行き、救済された。水の精の方はこんな仕打ちを受けてかんかん——なにしろだれだって玩具を取り上げられて平気ではられないものね——になり、こつぴどい仕返しをしてやるぞ、と農夫を脅かした。ところで水の精は自分か食べる肉を——英国人や米国人のように——自身町の肉屋に買いに行く習慣だった。代価は古貨幣のボヘミア・グロツシェン銀貨で払った。これには穴が開けられていた。取りも直さず、精が湖中に誘き入れた娘たちが頸の飾り紐に通していた銀貨だったのである。そこで精が次ぎに店に來た時、肉屋は、うっかりしたように装って、穴あき銀貨を数えている精の親指に鋭い庖丁で切りつけた。水の精は蛙の卵みたいな血を流し、怒っていなくなり、二度と現れなかった。お蔭で農夫は復讐を免れた。

六六六 ヘルフェンシュタイン城の葡萄酒樽

リーゼンゲビルゲのボヘミア側山麓に小都市トラウテナウがあるが、ここからちよつと、さよう、一哩ほど入ったところに高い巖山があり、その頂上に昔ヘルフェンシュタインと呼ばれる城が建っていた。もつとも今は後白波、テューリンゲンの歌人の山(DSB五一四)その他夥しい城館・城塞同様、人畜もろとも山の胎内に湮滅している。けれども伝説の方は湮滅することなく生き長らえている。ヘルフェンシュタイン城の住人たちはいつも大層喉を渴かしていたばかりでなく大層葡萄酒を蓄えていた。この葡萄酒も同じく山の底に沈んでしまったということで、これはなんとも遺憾である。さて一六一四年のこと、シュネーコッペ山麓のすぐ近くを水源とするアウパ

川河畔にあるマルシェン村に一人の娘がいて、この荒寥とした峡谷で家畜の番をしており、ヘルフェンシュタイン城の傍に來た。そして一緒にいた三人の子どもたちに向かつて「おいで、ちゃんとヘルフェンシュタインまで登ってみようよ。もしかすると巖が開いてて、あそこにあるっていう大っきなお酒の樽が拝めつかもよ」と言った。そうしたら本当に巖が口を開けていたので、彼らは中に足を踏み入れ、控えの間みたいなどころを抜け、廊下を通って大広間に入った。そこに十桶入りの大樽が鎮座していた。樽板も篋もあまり残っていないかったが、指の太さほどの酒石の膜が樽を覆い、中身は洩れずにいた。この膜に手を触れるたびに、膜はへこんで軟殻卵のようにぶるぶる震えた。音楽や楽しそうなさんざめきが聞こえて来る脇の部屋から、なんとまあ、古風ながら装いを凝らした一人の殿が歩み出た。殿は赤い羽根飾りを付けた帽子を被り、錫製の大杯を手にし、樽から葡萄酒を注いだ。そして、「そなたたち、中へ入れ。中ではおもしろくやつておるぞ」と言った。しかし娘と子どもらはしりごみした。酒杯から葡萄酒を飲むよう勧められもしたが、これも断った。すると殿いわく「ここでわしを待つておれ。小さな杯を持つて来てやる」。殿が別室に姿を消した途端、娘は「子どもたち、走りな。急いで外へ出るんだよう。この山の中の衆は皆極道者で呪われてるっていうから」と言った。——そこで一同は慌てて外へ出た。背後で轟然と音がして幾つもの扉がぱたあんと閉まった。それから凄まじい騒ぎが起こった。——一時間ほどして皆が恐怖から回復すると、娘はまた気が強くなり、「一体どうしたんだかさ、あの凄い音はなんだったんか、巖が崩れたんかとか、見て来よう」と言い、子どもたちを、もう一度山に登ろう、と説き伏せた。けれどもどうしても入口は見当たらず、巖はどこかしこも閉じたままだった。

六六七 石の新床いしのだとこ

リーゼンゲビルゲの別の山の上にこれまた城が建っていた。城には騎士の寡婦かぶが一人娘とともに住んでいた。娘は近隣のある若い騎士——ヘルフェンシュタイン一族だっただかも知れない——を愛していた。けれどもこの青年は、「娘欲しけりや、その母親に取り入らなくてはなりません」という諺ことわざの教えに従うのをなおざりにした。そこで娘の母親も青年が気に喰くわず、わたしが生きている限りあんな男を絶対婚むこにしない、と誓った。娘の方は若い騎士に激しく恋い焦がれていたので、許婚いざなひとなり、お母様が目を瞑つむりしだいあなたと結婚します、お母様だって永久に生きてるわけじゃないんですもの、と約束した。これを耳にした母親は神前にひれ伏し、狂おしい激怒いかどに駆かられながら、わたしをこんな酷ひどい目に遭あわせる娘の新床が石に変わりますように、と祈り、呪じゆった。こう呪詛じゆそしてすぐ老女は死んだ——勤勉な糸紡ぎ女の娘を、月へ行つてしまえ、と呪ったあの母親（DSB三三三）のように。なしろうこうした呪詛は長寿の霊薬とはならないのでね。さて娘も母親同様言葉ことばを違たがえず婚約者と結婚、喪には服さなかつた。晴れやかな婚禮が執り行われたが、真夜中、娘が新床に入ると、母親の呪いが成就した。恐ろしい雷鳴が轟とどろく内、城は崩れて瓦礫がれきと化し、周囲を取り巻く谷に沈んだ。ただ初夜の閨房けいぼうの土台となっている巖角いわかどだけが残り、新床は石に変わって巖頭高いわがしらくに引つ掛かつていたが、羽根布団などあらばこそ——それこそ敷き藁わら一本、蚤のみ一匹だつて見当たらなかつた。でも娘は——花婿不在のまま——床の中にいた。けれども目が廻るような近づき難い高みにだれからも見棄てられて、へばりついているのは己おのが悲嘆懊惱おのうのうと、鴉からすども、禿鷲はげじゆども。これらは巖の頂きをギャアギャア啼なきながら飛び回り、遂には花嫁の体を喰くらい尽くした。この巖角はいまだに聳そびえている。

六六八 惡魔の髑トワエルスラフン

昔、ケーニギングレーツ(23)の下手、エルベ河畔のすぐ近くに、富裕を極めた修道院オバトヴィッツがあった。このベネディクト会派修道院は途方もない財宝を所有していた。しかしながら修道院長と二人の最年長の修道士以外はだれ一人財宝の隠し場所を知らなかった。皇帝カール四世はかねがねこの財宝を見たいと念願していた。ご覧になれるのは陛下ただ御一人(24)、ということと許可が出たが、それも、宝物庫へは目隠しの上にてご案内つかまつりまする、との条件付き。これは実行され、皇帝は豪奢な富を悉く目の当たりにして驚嘆した。もちろんこの財宝——グルデン金貨四百万枚の値打ちがある——が己のものではなく、いたずらに死蔵されているのが無念で堪らず、あの壮麗な城カールシュタイン(25)の建設費用に回せればなあ、と思い、いたくご不興の態で還御あそばしたのだ。……それから酸鼻なフス戦争の時代となり、フス派の総司令官ツイスカ(26)も、カール四世が両の目で見たものをその隻眼で見届けたいと渴望し、心楽しく宝を見つけて掘り出したいと思った。しかし一般の修道士たちは宝について何も知らなかった。そこでこのおっかない英雄は院長と例の二人の修道士を残酷に拷問させ、埋蔵場所を教えよ、と迫る一方、修道院自体上から下まで、全ての通路、穴蔵、地下牢を徹底的に搜索させた。しかし、前者はいつかな白状せず、兵士たちの方も得るところなし。院長は「宝はそちに貪られるよりも惡魔の髑に吞まれる方がよいわ」とツイスカを罵り、やがて拷問中に息を引き取った。ところで修道院の近くに惡魔の髑なる場所があったのだ。これは怒濤逆巻くおどろどろしい深潭で、しばしば轟轟と水嵩を増して周辺に溢れ出し、かしの低地にあるチエツエルカの湖沼群を覆い、土地を浸食、湖にしてしまおうとするのだった。そして、なんとまあ、ある嵐の

吹き荒ぶ夜、悪魔の罅は修道院をその財宝もろともぱっくり呑み込んだ。修道院は水底に姿を消し、その上には波が打ち寄せるばかり。エルベ川が静かに流れ、水位が低い折、漁師たちは修道院の壁の一部をまだ目にするがある。修道院は——悪魔の罅を塞ぐことはどうしても不可能と思われたので——エルベ川からもっと排水するため掘削されたオパトヴィッツ運河にその名を留めている。

六六九 金貨鼠

一人の貧しい小間物行商人が、ボヘミアの尾根と呼ばれるかの山地を越え、生まれ故郷であるケーニギングレーツ郡の小都市ライヒェナウへと下っていた。くたびれたので巖に腰掛け、麵麪を一切れ食べ始めた。これがこの男の食事の全てだった。喉が渴けば山地から谷へと樂しげに流れ下っている清らかなジープニッツの泉からだれ憚るところなく飲めばよい。すると地面に一匹の小鼠がちよろちよろしているのが目に留まった。鼠は男の真ん前に坐り込み、やはり腹を減らしている様子。そこで小間物屋が麵麪屑を撒いてやると、鼠は旺盛な食欲ですぐさま平らげてしまい、麵麪が無くなるまで何度も何度もお余りを貰った。やがて旅人は当然ながら渴きを覚えたので、泉へ足を運んで水を飲み、担いで来たささやかな品物を置いてある元の居場所にもた戻った。すると小鼠がいたところに金貨が一枚あった。そのうち鼠がまた戻ったが、もう一枚金貨を運んで来て、それを最初の金貨に加えて走り去ると、またまた三枚目を持参した。そこで行商人が、ちよろまかすどころか物をくれたこの感心な動物の後からついて行くと、鼠は穴に走り込み、金貨を外へ運び出した。小間物屋が旅杖の石突きで穴を掻き回すと、財宝が埋まっているのが分かった。掘ってみると、壺一杯のボヘミアの古グルデン金貨だった。どうやら全く

のお礼心から金貨を授けてくれた鼠はどこへ行ったかと探したが、姿はさっぱり見えなかった。男は喜び勇んでライヒエナウへ下り、自分のためには金貨のほんの僅かしが取っておかず、貧民にたっぷり施しをし、残りで同地に三位一体教会を建立した。教会に詣でると、この物語を石に彫られた形で観ることができると。

六七〇 チェヒとレヒ兄弟

太古、カルパティア山脈⁽²⁸⁾周辺の地に兄弟が二人、首長として暮らしていた。その名はチェヒとレヒ⁽²⁹⁾。やがて土地と土地に対するさまざまな主張・要求が原因で同族間に不和が勃発したので、兄弟はその係累はば六百人とともに旅立ち、真夜中の方角へと進んだ。両首長は諸人の前を騎行、更にその先頭には翼を揚げた黒鷲を描いた黄色い旗が一旒掲げられていた。

こうして彼らは最後に一座の高山が見下ろすボイないしボイエムの地に到達、野営して休息、土地の様子を窺うと、地味は豊饒、地勢は快適であることが分かった。朝、山の頂きに登った二人の兄弟が周囲を遠望すれば、目に入ったのは森の生い繁る肥えた土地で、鱗族多なる流れも見えたので、このことを民衆に伝えた。その翌朝の夜明け方、チェヒは自分の家族およびもろともにここまで来た全ての者を呼び集め、木の切り株に腰を下ろし、弟、友人、仲間に向かってこう言った。「この地に落ち着き、ここへお導きくださった神神に感謝の供儀を執り行おう。わしがおぬしに約束したのはこの地だ。この地は実り多く、快いので、これからこの地に名を付けようではないか」。演説者と旅をともした人人はさながら天啓を受けたかのごとく異口同音に「我らが首長であるおぬし、チェヒの名以上に相応しい名がまたとあらうか。おぬしの名を取り、チェホーヴァ、すなわちチェヒの地と呼ぶの

が至当である」と叫んだ。

すると首長は立ち上がり、天を仰ぎ、次いで地に身を投げ、大地に接吻し、再び身を起こすと諸手を差し伸べ、祝福の言葉を尽くして神神の授けたもうたこの地に挨拶した。そして己が民とともにこの地に留まった。人人は増え拡がり、質朴、平和、勤勉、正直、かつ客をもてなすこと懇篤に暮らした。この地に到来して九年が経つと、またしても土地が足りなくなった。そこでレヒは兄に別れを告げ、己が民と配下を引き連れ日の出の方角へと出発することにし、後に残る者たちが、あまり遠くに去らないでくれ、と懇願したので、彼らにこう語った。「愛しい兄と仲間たちよ。三日目の朝、暁の明星が昇る前、ジープの山上に登ってくれい。その時いる場所で、わしは大きな篝火を焚こう。わしが一族郎党とともに居を定めたのはその火と煙が立つところだ」。

これは実行され、レヒはボヘミアで最初の町を建設、煙という言葉からこれをカウジムと名付けた。

チェヒが最初その部衆とともに山麓に殖民したジープ山は今日の聖ゲオルゲン山である。チェヒは更に七十年命長らえ、やがて亡くなり、長い間全ての邦民から悼まれた。

六七ー クロクとその娘たち

チェヒとレヒの時代が終わると、民と邦とはザモという支配者を得た。ダゴバート王がフランケン⁽³¹⁾の邦とテューリングンを統治していた時代のことである。ザモはボーイ人とヴェンド人の君主だった。この二人の王は干戈を交えるに至り、フォイクツ山の傍でザモとダゴバートの間に大会戦——三日続き、何千もの命が失われた——が行われた。戦場に勝利者として残ったザモはテューリングンとその近隣諸邦全てを荒廃させた。ザモ王没後、ボーイムの

民は君主を持たず、部族の最長老に従い、これをヴラディカと呼んだ。こうした最長老にクロクという者があつたが、その叡知・公正の評判は全邦に鳴り響いたので、民はクロクを士師にして君主に選んだ。チェヒの埋葬場所の上でチェヒの椅子に坐らされた彼の手に、人人はチェヒの杖を渡し、その頭にチェヒの被り物を被せ、彼の掟と命令に喜んで服従する、と忠誠の誓いを立てた。民は賢明な支配者にありとあらゆる愛を表明、彼のために城——もとより木造に過ぎなかったが、かなりの高樓——をとある山の麓に築き、自分たちはその山の周囲に家を建て、城と町をブーデチュと命名した。その後クロクはボヘミア邦のありとあらゆる場所に石で堅固な棲処を造った。その中にはお気に入りの城プサーリもあつた。後代ヴィシェラトが聳え立つたのはここ。プサーリなる名はチェヒの故郷の城に由来する。

クロクはこの邦の初代の士師にして君侯、かつ初代の祭司でもあつた。彼は予知能力があつた。これは精霊やピルヴァイゼたちから学び、更に妻ニーナが三人生んでくれた娘らに教えた。娘らは絶世の美人で、精神も知性も父より立ち勝つていた。長女カーシャは薬草、石、金属の性質と効能に悉く通じ、練達の医師にして精通した予言者だった。次女テトカはピルヴァイゼで、民衆に森や水や山の神神に仕え供儀を執り行う術を教えた。三女——一番末が一番美しい——はリブツサ（リブシャ）といい、予言者であり、かつ思慮分別に掛けては姉たちを遙かに凌駕していた。そして優れた洞察力に関して男女とも彼女に比肩し得る者はなかった。

クロクが三十九年統治して亡くなると、その死を知った民草は大いに嘆き悲しみ、女王蜂を求める蜜蜂のように家家から走り出、娘らは、父上の御霊を光明の正道にお導きあれ、と神神に呼び掛けた。

それから邦民はクロクの亡骸をチェヒ公および夫に先立つた妻ニーナの奥津城の傍らに埋葬、豊かな捧げ物を墳墓に夥しく供え、石を積み、犠牲の火を焚き、高らかに挽歌を歌った。

六七二 リブツサ

クロクの没後、その三人の娘らは父の遺邦を相続、これを籤引きで分けた。その結果カーシヤはこの邦の真夜中の部分を、テトカは日没の部分^にを、リブツサは父が残した高みの城プサーリとともに日の出の全地域を得た。リブツサの名声は全土に遍く広まり、あらゆる民衆は、争い事があればその裁きを仰ぐために、あるいは未来の出来事についてその託宣を伺いにやって来た。彼女自身の生き方は乙女らしく淑やか、臣民の鑑だったので、民草は一致してリブツサを女士師かつ女王に選んだ。

リブツサはプサーリ城を拡張し、堅固にした。そしてこの高みの城でしばしば侍女たちを足許のぐるりに侍らせてこごしい巖頭に座し、眼下に広がる地域を思索に耽りながら眺め、審判を、あるいは予言を下した。ある日彼女は、今後この城をプサーリではなくリビーンと呼ぶように、と命じた。なおこの邦に粗鉦の塊として見つかる金銀は女王に送られ、彼女は鉦山業を興した。

六七三 鉄の卓子

リブツサはしばらく女王としてボヘミアの民を支配したが、人人は、是非ともご配偶をお選びください、と望んだ。そこで彼女は自らが召集した民会で数数の予言を語り、民の要求を思い留まらせようとした。しかし民衆および貴族は主張を譲らず、王を求めて止まなかった。

「さあ、それなら」とリブツサ。「出発なさい、皆さん。ビリーナ(註)の川縁(註)指して。かしこのスタディチュ村(註)の広野に特別な畑が見つかりましょう。一人の男が二頭の斑(註)の牡牛を犁(註)に付けてその畑を耕しています。そのお人こそそなたたちの王となるべき方」。

それから彼女はこの邦(註)の選り(註)すぐりである男を三十人選び、王衣と外套(註)を携え、新君主を探さよう命じた。使節たちは、間違はなく本物を見つけられるよう、そのお方のもとと詳しい特徴を伺いたい、と願った。リブツサは言った。「わらわがいつも乗っているあの白馬を連れて行き、そなたらの前を好き勝手に走らせるのです。馬はその方を探し出し、嘶(註)いたり、その他の仕草をして、紛れもない、と教えてくれるでしょう。その方は『鉄の卓子(註)』で食事をなさいますから、そのことでもそなたらに分かります。平安を愛する神神が道中お守りくださいましょう」。

そこで三十人の男たちはリブツサの愛馬を先頭に立てて出発した。馬は中央山地のスタディチュ村目指して走り、三日目に一行は二頭の斑の牡牛を使って畑を犁(註)き返している男を見つけた。彼らは男に近づき、ご機嫌よう、と挨拶(註)したが、男は挨拶を返さなかった。すると馬が嘶(註)き始め、男の前でひれ伏した。男の名はプシエミスル(註)とあった。

リブツサの使節らは男に豪華な衣装を見せ、更に自分たちの使命を伝えた。するとプシエミスルは手にしていた榛(註)の笞(註)を大地に突き刺し、「来たところへ帰るがよい」と言いながら牡牛どもを犁(註)から解き放った。牡牛どもは二頭とも空中に昇って行き、一旦は雲際に漂っていたが、また下りて来て、とある巖(註)へと向かった。すると巖はすぐさま口を開いた。牡牛どもがその裂け目へ入ると、巖はすぐさま閉じた。瞬時にして巖からせせらぎが流れ出し、厩(註)のような臭いがした。農夫が大地に挿(註)した榛の枝からはたちどころに緑の若葉が萌え、三本に枝分かれし、幾つか実も付けた。

こうしたことを全てを目の当たりにした女王の使節らは驚嘆したが、農夫が犁を引つ繰り返し、一緒にいかがかと外来の者たちに勧めながら、昼食を摂ろうと、その刃の上へ黴の生えた一塊の麵麴と一切れの乾酪を置いた時はいやが上にも仰天した。リブツサが告げた「鉄の卓子」とはこれだったのである。筈だった榛から生えた枝の内二本は枯れ、三本目だけが青青と伸びた。使節らが訝しんでいるのを見たプシエミスルはこう言った。「卿ら、何を不思議がっておられる。これはな、我が一門から出て統治を始める血統は多かるうが、王になるのは一系統のみということ。卿らの女君主が、窮したとは申せ、かように急がなかったらなあ。卿らの来るのがもっと遅かったら、わたしはこの畑地をすっかり耕していた。して、そうなっていたら、この邦は未来永劫食べ物に事欠くことはなかったろうし、この二本の枝は枯れなかったろう。しかしかくなつては時折飢饉に襲われるであらう」。使節らが、なにゆえ鉄の上でお食事を召し上げられる、と問うと、「我が家系は卿らを懲らすのに鉄をもつてするということ」が返辞だった。――食事が済むと、プシエミスルは長衣を纏い、美しい外套を羽織り、新しい靴を履いた。しかし、彼自身が科の木の樹皮で製し、科の木の鞞皮で縫い上げた古い靴も携えて行つた――ボヘミア最初の男性君主の出自を忘れぬためである。プシエミスルが到着すると、リブツサは、姉たち、相談役たち、騎士たち、そして全ての民衆ともども、素晴らしい装いで出迎え、にこやかに挨拶して夫君に選んだ。この初代ボヘミア王以来、その後戴冠式の際、冠を戴く前、一メツツエの棒の実を振り撒く、という習わしが決められた。これはスタディチュ村の住民が献上しなければならぬが、ここの村民はそれ以外いかなる租税も免じられていた。それから、戴冠式の際いつも君主の前に代代聖なるものとして保管されて来た科の木の樹皮製の靴が持つて来られ、遠津御祖の事蹟に倣うよう、象徴的に示されるのだった。この靴はフス戦争中初めて行方不明になった。しかしながら榛の枝は渝わらず緑に生い繁り、その樹は今日なお思い出のよすがとしてスタディチュ村に見られる。

六七四 プラガ

プシエミスルの治世が始まったある夏の日のこと、王妃リブツサは夫君と連れ立ち、扈從に取り巻かれて、リブーン城を出、かのこごしい巖椅子に登った。そこに坐ると予知の霊がしばしば彼女に下るのであった。この時もまた霊に満たされたリブツサはこう予言した。「わらわには霊の中にその名声が天にまで届く都市が見えます。ここから三千歩離れた、かしこの木木の生い繁ったところ、ブルズニカの小川が地を穿って流れ、ヴラタヴァ（モルダウ）に落ちるところ、ペトリジンの山がこつこつと険しくそそり立つかしこ、かしこの森の真ん中にそなたらは男を一人見つけるでしょう。男は家の敷居を作っています。丈の高い者たちも敷居の前では身を屈めなくてはなりませんから、かしこに建設される都市の名は敷居に因みましよう」。——男たちがすぐさま出発、リブツサの予言の通りに行動したところ、一人の大工を見つけた。大工は柏の樹を伐り倒し、これを刻んでいた。何を作っているのか、と訊かれると、「プラフを」と答えた。すなわち敷居である。

リブツサの命に従い、この地に壮大な都市が建設された。都市は敷居に基づきプラハとかプラガとか名付けられた。

六七五 リブツサの沐浴場

往古の山寨ヴィシエラトがあつた場所にはそれ以前にリブーン城があり、ここでボヘミア初代の王と王妃は宮廷

を開いた。高く直立した巖があるが、これは滔滔と流れ過ぎる川の深みにある寢台から聳えているのだ、と人は言う。この巖上には円形城壁の遺構があり、こんな伝説が行われている。かの高貴な女君主はよくここから身を躍らせ、モルダウで沐浴し、川の精とも語らった、とか。一説にいわく。巖上にはその昔塔があり、かの女魔法使いは塔の中へ若者たちを誘ったのだ。若者たちは彼女の美貌に惑わされ、盲目的に従った。しかしやがて情欲が満たされると彼女は、惑わされた生贄たちのいずれも寵愛されたことを洩らさぬように、彼らを自らの抱擁から冷たい波による死の抱擁へと突き落とした、と。

またこう主張する者もいる。ヴィシエラトの高みにリブツサの沐浴場を求めても詮無いことで、この古い王城の南にある水量豊かなゲツェルカの泉こそリブツサの沐浴場なのだ、と。もしかするとこちらの方がもっとものかも知れぬ。ヴィシエラト地区で唯一のこの泉は古木の林の中で水晶のような水を滾滾と噴き出している。昔日のボヘミア公らはこの泉の畔で選出された由。幾つもの巖が泉を囲み、鏡のような水面に静寂が漂っている。

六七六 リブツサの寢台

往古の王城ヴィシエラトがあつた巖頭の下、滔滔と流れ過ぎるモルダウの深い川底に魔法使いの女王リブツサが用いた黄金の寢台がある。リブツサは川の精となり、自分自身をここに呪封して最愛の家とした。眉目好い青年たちが少なからずかしこの流れで姿を消した。水浴している時この上もなく典雅な顔の女性に微笑み掛けられ、水底へ誘われたのである。川がこうした生贄を要求するたび、民衆は「あれはリブツサに引き留められたのだ。彼女は毎年別の男を選ぶ」と言う。——怖いもの知らずの泳ぎ手が、リブツサの黄金の寢台を探そう、あるいは伝説を嘲

ろうと、人の意見を聞き入れず、あえて水底へ潜ることも時折あった。潜って行く姿は見られても、ついで戻って来たためしはなかった。さてまた、こんな解^げしたい予言が口承されたこともあった。いわく。いつか流れの深みからかの黄金の寝台が現れて、小舟さながら水面に燦然^{さんぜん}と浮かぶことがあろう。これが起こるのはリブツサの家系から出た支配者がボヘミアに君臨する時である。黄金の寝台はこの君主に献上され、その配偶はその寝台の中で初子^{ういこ}の男の子を出産するであらう、と。

六七七 ヴィシエラトの悪魔の柱

ヴィシエラトの聖ペテロ聖パウロ教会の前にずんぐりした石柱の破片⁽⁵¹⁾がある。これはこういう徴^{しるし}なのです、と外来の客に説明されるのだが、その伝説は以下のごとし。

ヴィシエラトの裾^{すそ}に住むある司祭が悪魔と盟約を結び、弥撒^{ミサ}を執り行っている間に悪魔がローマなるヴァティカンの教会から石柱を一本ヴィシエラトへ運んで来る、という条件で、魂を譲る証文に署名した。

悪魔^{サタン}はこの協定に従い、ちよいともんざ、と高を括^{くく}って急遽^{きゅうそ}ローマへ向かい、またとつことんば返りした。けれどもヴェネチア湾⁽⁵³⁾を翔^とび越えていた時、目に見えない手がその背中にしたたかな咎^{とが}の一撃を喰^くらわせたので、痛さのあまり身をよじり、柱を落としてしまった。慌^{あわ}てて海中に潜り、柱を引き揚げたものの、またひっぱたかれて柱を取り落とし、これが合計三度に及んだ。ようやくと到着した時には司祭が「行^イケ。送^{ミサ}ラレタリ⁽⁵⁴⁾」と唱え終わるところだった。そこで悪魔はかんに怒り、柱を教会の屋根に投げ落としたので、柱は三つに折れて屋根を打ち抜いた。他に二つの破片⁽⁵⁵⁾が聖ペテロ聖パウロ教会入口左側にある聖フランチェスコ礼拝堂と聖パウロ回心礼拝堂

にまだ長いことあった。悪魔はこう愚痴つたそう。な。「ヴィシエラト主教会の守護聖人をしとるペトルス聖者がおいらの邪魔をして、三度もあの柱をヴェネチア湾の水溜まりに落つことさせなきゃ、運ぶのに充分間に合ったのによ」と。

大方の説によれば、このローマの教会の柱なるものは、聖ピエトロ大聖堂——この柱は一本も欠けていないのだ——ではなくて、テヴェレ川向こう側の聖マリア教会の柱である由。ブラークのさる市参事会員がかつてこう厳かに断言している。自分がローマに行った折、てぐえれ川対岸にあるマリア教会の柱が一本足りないのをこの目でしかと見届けた。柱があつた場所には磔刑像が置かれている。他の石柱はヴィシエラトにある砕けたやつと全く同じだ、と。

昔ローマに一人のスイス人が住んでいた。彼は子どもの時から様様な名前のたくさんの悪魔に取り憑かれていた。ある祓魔師がザルダンなる名のそうした悪魔の一匹を呼び出し、憑かれた者の頭上にイグナチウス聖者の聖遺物の入った丸い小箱を載せたところ、悪魔ザルダンは「熱い、熱い。焼けるう。わあ、痛え、痛え。碾き臼か聖ピエトロ教会の柱を載つけた方がまだましだ。そうさ、おらあ、あそこの柱を一本ブラークへ運ばにやあならんかった。そいつは三度もおらあを離れてでつけえ水溜まりに落つこちやがった」と喚き叫んだ。

六七八 ドラホミーラの柱

ブラークなるフラジンの丘の上、かつて聖マタイ教会が建っており、現在は黄金球亭がある場所には古い記念柱があるが、これは遙か昔から伝えられたこんな物語と結び付いている。

第十二代ボヘミア公⁽⁶⁰⁾にはドラホミーラなる名の妻があつたが、彼女は、子息が既にキリスト教に帰依^{きゐ}したのに、いまだに異教にしがみついていた。ヴラティスラウ⁽⁶²⁾が亡くなった時、その子息たちヴェンツェスラウ⁽⁶³⁾とボレスラウはまだ未成年だった。そこで摂政となったドラホミーラは異教徒の徒党を使つてキリスト教徒を迫害した。これについては物語が多多ある。けれども彼女の子息ヴェンツェスラウが丁年に達すると、彼はキリスト教の力強い擁護者となった。これに烈しく立腹したドラホミーラはある日、ザーツ⁽⁶⁵⁾なる自分の父の墳墓に赴き、そこで古の神神に供儀を行う、と誓いを立てた。ところが座乗した馬車が聖マタイ教会の傍に來た時、神の家の中から弥撒^{みさ}を告げる鐘の響き^{ひびき}がするのを耳にした駭者^{ざいしや}は、キリスト教徒だったので、馬車から跳び下り、鞭を投げ棄てて跑^{はし}いた。邪な異教女は途方もなく逆上して悪口雑言を吐き散らし、神とキリスト教とあらゆる聖人方を呪詛^{じゆそ}した。——するとなんと、稲妻^{ひらめ}閃き、雷鳴轟^{とどろ}く内、大地がぱっくり口を開き、ドラホミーラを車馬もろとも奈落^{ならく}の底へ呑み込んだ。深淵からは煙と焰^{ほのお}がどつと噴き出し、凄まじい悪臭が大氣を汚染した。それから裂け目は閉じ、後に残ったのは駭者の鞭のみ。駭者は熱誠籠^こめて神に感謝した。教会から出て來た司祭と信徒の群れにはまだ地底の阿鼻叫喚^{あびきょうかん}が聞こえた。その後長いことこの場所には垣が繞^{めぐ}らされていたが、垣を踏み越えた者は、奇妙なことに、その日の内に何か呪いの兆^{きざし}を感じるか、社会的恥辱を蒙^{うむ}るかしたので、やがてぐるりに塀が築かれた。またいつまでも忘れないように、石柱もここに立てられた。旅籠屋^{はたごや}柳亭^{やなぎてい}の近くである。そして柱には怒れる天の審判⁽⁶⁶⁾について記された。——このフラジン城の窓から一六一八年皇帝の使節らが投げ落とされたわけだが、これは血みどろの三十年戦争の発端となった。

六七九 プラーク橋とその象徴

プラーク橋⁽⁶⁷⁾は大昔から広くその名を知られていた。長さ千七百七十歩、幅三十五足尺^{フーズ}、十八の飛梁^{ひりょう}に支えられている。建築が始まったのは皇帝カール四世治下で、物価の安い時代だったから、一プフェニヒ銀貨で卵^{ダース}が一打買えた。そこで建築棟梁は卵と葡萄酒を石灰に混ぜ、灰泥^{モルタル}を極めて強固にしたので、使用石材は砕けこそすれ、接着部が離れることはなかった。

架橋費用はスロヴァン教会⁽⁶⁸⁾ないし聖エマウス修道院建立費よりヘラー銅貨一枚分多いただけだった。

橋の最も有名な象徴は旧市街側の袂^{たもと}にある幅広い橋塔両面に付いている五羽の小さな家鴨^{あひる}である。この塔は他にもさまざまな彫像で飾られている。この家鴨たちについて民衆は「まともな生まれでないやつにや、五匹⁽⁶⁹⁾全部は見えんとさ」と冗談³³を言う。

二つ目の象徴は小地区^{クラインザイデ⁽⁷⁰⁾}側橋塔の旧市街に向いた部分に見られる。高みの塔の鋸壁^{きょへき}に隙間³⁴が一つあるのだ。昔、一二五二年キリスト^{じゅうにがっ}月十七日、ベルトルト・フォン・ベルトルディという貴族がプラーク橋を騎馬で渡っていた。塔のところで二羽の鴉^{からす}が喧嘩^{けんか}をしており、啼き喚^{なわめ}いてばさばさ激しく羽ばたいた。そうして壁石の一つに触れたのだが、この石はどうやらもう随分前からぐらぐらして壁から外れかけていたらしく、落ちて騎士の頭を直撃した。そこで騎士はあつという間に落馬し、その場で息を引き取った。数多くの貴顕、それから王ご自身すらこの騎士の死を哀悼した。

三つ目の象徴はブラディチュ⁽⁷¹⁾、またの名髭^{グロースバルト}もじやである。旧市街^{アルトシュタット}の聖母十字架教会施療院下の飛梁に古い奇妙な

男の頭部が嵌め込まれている。これは頗る大きな髭の持ち主。ボヘミア人はブラディチュと呼んでいる。この頭は住民にとって水災を知らせる徴である。つまりモルダウが増水し、モルダウの水車流路でこの古い石像の髭まで水位が上れば、住民は避難する。氾濫の危険が迫っているからである。

最後にプラーク橋についての昔からの諺をご披露しよう。いわく「プラーク橋を渡るときや、坊さん、娼婦、白馬に出逢わぬことはありませんぬ」。

六八〇 ボヘミアのアダム派

一四二一年ボヘミアの邦にもあのまことにおぞましい宗派が興った。近代だったら彼らの信条を「肉体の解放」とでも名付けたことだろう。この宗派の信徒は衣服を身に着けることを否定した。神は父アダムと母エーファを樂園でやはり裸でいるようにお創りになった、というのがその理由（DSB三六五）。従って彼らは樂園でのように裸で生活した。もつとも「アダムとエーファのように」純潔とは到底言えなかったけれども。男女とも前垂れをしなかった。彼らは恥ずかしがらないのだ。これら恥を知らぬ有害な痴れ者どもに附和雷同する連中が多かった。何分無恥愚昧な行動は感染するもの。アダム派のある者は自らアダムと名乗った。またある者は「神は存在しない。人間こそ神なのだ」と言った——近代の同思想の哲学者たちもこうした意見。なにせ天が下に新しきこと無しなのでね。ボヘミアに現れた連中以前にもアダム派はいた。人間の愚行、邪悪、肉欲と来たらその時代時代の新装を凝らして繰り返し登場する。なおボヘミアのアダム派にはフス派がさつさと留めを刺した。

六八一 犬の洗礼

ラコニッツ郡のベラウン⁽⁷³⁾ではかつて住民が混じり合っていて、半ばがドイツ人、半ばがボヘミア人だった。そこで同地ではドイツ人の礼拝式とボヘミア人の礼拝式が別別の司祭によって執り行われた。従って人種差別から来る衝突——スラヴ派は今日に至るまでこれ続けようと努めている——が起こらずにはいなかった。とはいえある時ベラウンでボヘミア人になんともひどい非道を働いたのはドイツ人である。彼らは犬を布やら服やらで幾重にもくるんで教会に行き、「どうか急いでおいでください、ドイツ人司祭が留守なのですが、赤ん坊がひどく弱っているのです⁽⁷⁴⁾」との口上で、ボヘミア人司祭を呼びにやった。ボヘミア人司祭は聖務を行おうと快く法衣を纏^{まと}って教会にやって来たが、犬が襦袢^{ひつち}や洗礼衣装に包まれているのを目にして仰天し、嫌悪に身震いした。人でなしのドイツ人どもは愕然^{がくぜん}としていた司祭をげらげら笑いのめし、犬をボヘミア人用洗礼鉢^{ばち}に投げ込み、すたこらさつさと逃げ出した。数人のろくでなしの青二才が犯したこうした破廉恥極まる冒瀆^{ぼうとく}行為の結果は恐ろしいものだった。激怒した司祭は血の気の多い同族を糾合^{きうごう}、彼らは武装して惨殺を始め、ドイツ人を悉く^{しつじく}ベラウンから駆逐したのである。

六八二 臭い爆弾

ベラウンとブランクの間にある高い巖山^{いわやま}の上に壮大な城郭にして要塞たるカールシュタイン⁽⁷⁵⁾がある。これは国土を守り、敵勢を挫^{くじ}くため皇帝カール四世が築いたもので、いまだによく保存されており、昔の遺物と見所に満ち、

巨大な塔⁽⁷⁶⁾、幾つもの教会や礼拝堂、王の広間、地下深くの牢獄を備えている。かしこには聖女ルドミラの寝台⁽⁷⁷⁾、ゲオルク聖者が退治した無翼龍⁽⁷⁸⁾の頭蓋骨、その他夥しい貴重品と什器⁽⁷⁹⁾が見られる。一四二二年カールシュタインは攻囲され⁽⁷⁸⁾、要塞への射撃手段としてはおそらく空前絶後の飛び道具が使われた。城の守備隊はその正当な主君ジークムント王⁽⁷⁹⁾に忠誠だった。一方同王に叛旗を翻したフス派および扇動された諸等族はリトアニア大公ヴィトルト⁽⁸⁰⁾をボヘミア王に選んでいた——ポーランド王ヴラディスラウ⁽⁸¹⁾がジークムントから挽ぎ取られたこの危なっかしい王冠を受け取るうとしなかったのだ。ただしヴィトルトは自身来ることができず、摂政として甥のリトアニア公子コリブート⁽⁸²⁾を派遣、コリブートは騎兵五千を率いてプラークに進駐し、叛乱を起こした民衆に歓呼をもつて迎えられた。叛乱軍はこの異邦人をボヘミア王位のさまざまな権標でなんとしても飾りたいと思ったが、あいにくこれら王権の象徴はカールシュタインに嚴重に保管されており、城は城伯トウルクザ・フォン・ブライネ⁽⁸³⁾によつて勇猛果敢に防衛されていた。いや、そればかりではない、城伯はボヘミアの王冠を自身わざわざカールシュタインから持ち出して、秘密の安全な場所、ヴェルハルティッツ城⁽⁸⁴⁾に運ばせたほどである。攻城はまず火炮で始まったが、次いで石が投擲機⁽⁸⁵⁾で撃ち込まれた。こうした石弾にはプラークの雪の聖母マリア教会⁽⁸⁶⁾の石柱すら用いられた。しかしこれとてカールシュタイン城塞を攻略する助けにならなかったのだ、遂に攻囲軍はなんとも厭うべきことを思い付いた。ほぼ一万一千の石塊の他に臭い爆弾を抛り込んだのである。すなわち死んだ馬、驢馬⁽⁸⁷⁾、羊、犬その他の動物で完全に腐っているもの、加えて蛇⁽⁸⁸⁾、廁・汚物溜めの糞尿⁽⁸⁹⁾といった、およそ考えられる限りのあるとあらゆる悪臭⁽⁹⁰⁾芬⁽⁹¹⁾たる代物を詰めた二千の樽——これじゃあもう二度と塩漬⁽⁹²⁾け甘藍⁽⁹³⁾の仕込みなんぞにや使えませんが——だった。こうした穢らしくもおぞましい遣り口に守備隊は歯をがちが震わせたが、城塞そのものは小揺るぎもなかった。それにまた籠城側は悪臭爆弾に生石灰⁽⁹⁴⁾を被せ、大蒜⁽⁹⁵⁾と玉葱⁽⁹⁶⁾をせっせと口にして対抗した。次いで夏季四十

日の間休戦になると、ブラークの薬剤師たちは柏アイヒェの樹皮粉や明礬みょうばん、友知草ともしりそうで効き目のある練り薬を調製した。以後結局城塞はあらゆる欠乏に耐え抜き、ますます巧妙に防戦、一方攻囲側はほとほとうんざりし、地下に抜け穴が幾つもあつてしょっちゅう糧食が城中へ搬入されているのではないかと狐疑こぎ逡巡しゆんそんする始末。——そこでこういう決定が下された。聖マルティン祭(7)までは包囲を続けるが、それでも城側が降服しなければ、攻めたいやつはどうぞご勝手に。だつてな、その頃にや寒くなる。トルコ皇帝スルタンの新式軍団イェニチエリだつて、冬到来となりやあ営舎に引き揚げるわさ、と。兵糧ひやうりやうが乏しくなる一方の籠城者たちはこれを聞き込んで大いに喜び、万聖節と万霊節(8)——聖マルティン祭の八日前——を期して再度の休戦をいたしたい、と申し入れた。城で結婚式を挙げねばならない、との理由で。この両日になると、城内では笛や太鼓で陽気にさんざめいたが、実は新郎も新婦もおりはせず、葡萄酒ワイน์も無し、ましてや麵麴ペシも焙やき肉もあらばこそ。そもそも口に入れる物、がちがち震える歯が当たる物など何にも無かつたのである。なけなしの牡羊おたつた一頭以外には。城側はこれを殺し、四半身しはんみに切り分け、鮮血滴る背部から鞍下肉を切り取り、これにのる鹿じかの毛を詰め、上にまたいくらかの鹿の毛を散らし、月桂樹の葉と一握りの杜松ぬすの実も添え、これは獲れ立てののる鹿の背肉にて候そうろう、新鮮とは言い難いとは申せ肉を頂戴ちやうだいつかまつた御礼まで、との口上で攻囲軍に進呈した。贈られた方は「さてこそ城山の上の連中は生の猟獣肉にも全然不自由しとらんだ。こりゃあ撤退する潮時だて」と言った。——つまりはリトアニアはメーメルメーメルのグロームス袋(DSB二三三)と同じことになったわけ。リトアニアの公子は囲みを解かせた。攻囲軍に不穏な氣運が蔓延まんえん、ブラークの蜂起自体も危なっかしくなつていたのでなおさらのこと。同市の民衆は摂政や煽動者たち、茸きのこのようにぐんぐん膨れ上がる摂政部隊に前からとんと嫌気が差していたのである。かの公子の従兄弟が一人陣営にいたが、引き揚げとなつた時、この人はもう一度振り返り、カールシュタイン城を見上げて「引き揚げるのは残念至極。カールシュタインを内側から見た

かったものよな」と言った。その途端、城の高みでカルタウネ砲からお別れの一発がぶつ放され、びゅつと飛来した弾丸が発言者の頭を挽ぎ取った。

六八三 聖なる土

ボヘミアの邦のチャスラウ郡に名高いゼトリツ修道院がある。ここの教会はとても美しく、これを凌駕するのは僅かにプラークの大聖堂だけかも知れない。それゆえさしも残酷なフス派の司令官ツイスカもこの教会を傷つけることを禁じた。しかしそれにも関わらず彼の隊長の一人——禁令を聞き損なったのかも知れない——が教会を灰燼に帰せしめた。ツイスカはこれをやった者に金銀をたつぷり取らせるぞ、と約束、放火殺人犯が、ご褒美を頂戴できるとはありがたい、とほくほくして名乗り出ると、ツイスカは火でどろどろに溶かされた金銀をその喉にたつぷり流し込ませた。

この教会の傍にある墓地の土は——ヴォルムスのユダヤ人墓地（DSB四五）と同様——聖地から遙遙運ばれたものである。この土の中で遺体は二十四時間もすれば百年経ったように見える速さで朽ちる。申すまでもないが、神の恩寵の下に息を引き取り埋葬された亡骸に限る。地獄行きであれば、聖なる土が決して受け付けないので。この墓地にある納骨堂は骨を上手に組み合わせたものである。ある盲目の修道士があらゆる骨を巧妙優美に配置して作った。この墓地では多くの不思議が起こった。一六六三年七月十六日、白装束の亡霊たちが、手に手に燃える蠟燭を持ち、聖歌を合唱しながら、墓地全域を長い列を作って練り歩くのが見られた。そして一六五七年八月二十日、白い頭巾付き外衣を纏った教団員の大群がやはり同様に合唱しながら灯火を携えて歩き回った。同じくこの年

の復活祭^{オースターク}当日、例の骨製のお堂にルードルフ・ライヒエンベルガーなるイエズス会士がやって来て、なんとも言いようのない量の死者の骨にびっくり仰天、これらの骨が天福に与^{あづか}った人人のものであることを知らぬまま、連れに向かつて「この呪われた代物はどれくらいあると思う」と話し掛けた。こう口にした途端、全ての骨が大音響を立て立ち上がり、この御仁は亡霊たちによって骨のお堂から叩^{たた}き出された。イエズス会士はその後も相変わらずクッテンベルクから足を運び、学生たちと散歩したが、骨のお堂には金輪際踏み込もうとしなかった。

六八四 ザールの修道士たち

ボヘミアとモラヴィアの邦境^{くわんがい}にびったり接してザール修道院がある。敷地は一本の小川に分けられており、一半（大きい方）はボヘミアのエザスラウ郡、もう一半はモラヴィアの領域に入る。これ——一二三四年の建立——はもともとシトー会派修道院だったが、戦争によりひどく劫略^{きやくりやく}され、修道士たちはあるいは殺され、あるいは追ひ出されたので、修道院の管理者であるオルミユツツ司教⁽⁹⁸⁾デイトリヒシュタイン枢機卿^{すうききやう}は、一六一四年、見棄てられた僧房にフランシスコ会派の修道士を住まわせた。ところが彼らは亡霊の出没に大いに悩まされた。その次第は修道院の古年代記から認められる。殺されたシトー会派修道士が頻頻^{ひんぴん}と姿を現し、「我^ゲラノ許^{ディ}ヨリ去^{ノストリス}レ」（修道院から出て行け⁽⁹⁹⁾）と言って脅かしたのである。それどころではない——かわいそうにフランシスコ会派の修道士たちが礼拝に赴こうとか食事に行こうとかするたび、内陣の自分たちの席や食堂^{テール}の卓子が亡霊たちに占拠され、「食堂では」食事が平らげられてしまっていることがよくあった。こういった脅威になんともいたたまれなくなった彼らは、一六三八年、枢機卿の承認を得てシトー会派に修道院を明け渡した。以来亡霊の出現はもはや見聞きされな

かった。

六八五 ブーデチュの黒魔術学校

悪魔というものはいずれの時代、いずれの場所でも生徒や見習いになりたがる連中には事欠かなかった。ドイツ内外、サラマンカ、トレド、クラカウ、および北フリースラント（DSB一八九）、それからボヘミアのブーデチュにも例がある。同地にあったのがこの種の悪魔師範学校最古のものたることは疑いない。既にリブツサがその姉たちや侍女ら——その後悪魔に取り憑かれて例の血みどろの乙女戦争をおつ始めたのはこの乙女たちである——と共に、この学校でありとあらゆる魔法や黒魔術の研鑽に励んだ、と伝えられているのでね。その後ブーデチュには立派なキリスト教の学園ができた。プラークの大学が設立されるずっと前で、当時はそもそも大学なんぞ影も形もなかったのだ。そしてボヘミアでラテン語が教授されたのはこの学園が皮切りである。現在このブーデチュにはもう長いこと瓦礫の山と幾つかの放棄された溝があるだけ。場所はプラークと小さな町ヴェルヴァルン——これも古く九九六年に建設された——の間である。

六八六 ザーツに迫る亡霊の軍勢

一二〇一年のこと、ザーツ(註)の市民たちは武具が鏘然と触れ合う音、唳唳たる喇叭の響きに愕然として眠りから覚め、急遽得物を手にして市壁各所で配置に就いた。彼らは、町が建っている丘の麓に無慮無数の軍勢が波浪のよう

にどよめき、密集した隊伍たいごを組んで押し寄せ、数数の投擲機とうてきを据え、何本も塹壕ざんこうを掘り（掘）、攻城梯子はしごを準備しているの目にした。ザーツの市民たちは長弓ちやうきうの矢、弩いしゆみの太箭ふてや、石弾いしだんを雨霰あめあられのごとく攻撃軍に浴びせ掛けたが、優勢な敵に屈服せざるを得ないかも知れないので、大層怖じ恐れた。老人や女子どもは幾つかの教会ひやうきやうで跪ひざまずいて祈り、闘える男たちが勇敢に防戦している内、白白しろしろと夜が明け初めた。するとなんとまあ、市壁上の市民を除いては、廻り一円武装した者など皆目見えないのだ。送り出された斥候せつこうらは居たはずの敵勢の痕跡こんせきを何も発見できなかった。地面には市民軍が放った矢や太箭が一面に散らばっているだけ。そこで、あれは善良な市民をからかい、勇気を試そうとした亡霊の軍勢だったのでは、と類推せざるを得なかった。市民たちは市壁の外に出て行き、矢と太箭を回収した。

六八七 ズアターボル山の異教徒の墓

プラヒン郡（郡）の都市シュッテンホーフエン（町）から程遠からぬところにズアターボル山（山）が聳そびえている。高い山で、鉱泉が湧き、異教徒ハイデングラーの墓と呼ばれる囲い地がある。山麓の細流ヴオッタヴァはモルダウに流れ込むが、川砂には黄金と良質の真珠が見出される。これらはその昔シュッテンホーフエン——既に七九〇年に建設された、と唱えられる——の住民を豊かにした。ムーゲル（部）ども（モンゴル族、タタール族）がこの邦くにに侵入した時、近隣の者たちが妬みと悪意からシュッテンホーフエンが富裕であることをこやつらに密告、ためにすぐさま蛮族の一隊が財宝を根こそぎ掠奪しようと襲来した。当時の恐怖驚愕きょうわくはなんとも大きく、当然氣力も萎なえてしまいうさうだったが、一人果敢な男が立ち上がり、勇猛な軍勢を糾合きうごう、ズアターボル山麓で待ち伏せ、ムーゲルのお歴歴おれいれいに衷心ちゆうしんからご挨拶あいさつ申し上げたので、とどのつまりは累累たる敵の屍骸しかいを埋葬すればよいという結果にあいなった。逃げ延びた者は皆無だった。

勇士は異教徒どもを一つの坑に投げ込ませ、その上に高く盛り土をした。伝説にいわく。この異教徒の墓は年年親指の幅だけ鉾泉に近づいている。泉源間近に迫った時、ボヘミア王国に由由しい大変革が起こるであろう、と。

六八八 麵麴パンの靴セと小型丸白麵麴パンの靴ル

ボヘミアのある母親が子どもを亡くした。最愛の一人っ子だった。そこで柩ひつぎに納めた愛児をできるだけきらびやかに飾り、一番良い服を着せ、とびきり綺麗な花環はなわを被らせ、雪のように白い靴下と新品の赤い靴を履かせた。けれどもこの靴は硬過ぎて、子どものちいちゃな足に相応しくふんわりしているとは思えなかったので、母親はもつと柔らかなものを考案した。極上の粉を使つた麵麴パン生地シで靴の形を作り、それをあまり硬くなく焼き上げ、赤い靴の代わりに出来立ての茶色い靴を死児に履かせて埋葬した。しかし真夜中、蒼白な顔をした子どもが花環を被り、白い服を纏まとつて現れ、とても悲しげな様子で、母親に、靴を脱がせてちょうだい、と言うかのように、代わる代わるちいちゃなあんよを差し出したのだ。母親がさっぱり分からずにいると、子どもはまた消え失せた。こうしたことが二度、三度とあり、子どもが靴を示すので、母親は心乱れて仕方なかった。とうとう子どもがどうして欲しいのか気付いた母親は、棺を掘り起こしてもらい、麵麴の靴を脱がせ、赤い靴を履かせ、熱い涙を流しながら、また土中に戻した。以来母親は安息——最愛の一人っ子を葬った母親が得られる限りのではあるが——を得た。

クラッタウ郡オーバーの上カメンツェン村——シユタンカウシュを去る一時間ほど——から程遠からぬフラーデク山ベルクの城に纏まつわる——内容は全く別物だが——やはり不可思議な話がある。フラーデク山上に居を構えていた騎士は楽に教会詣もうでができるようシユタンカウまで行く橋を作らせた。なにしろあの辺りの山岳地帯やラドバザ河谷を通る道ときた

ら現今でも至極良好とは申し難い。まして昔は橋を舗装する習慣は無かったので、新たにできたこの参詣路（さんけい）とてごつごつしていた。そこで城主の高慢かつ優美な息女はそれが気に入らず、小型丸白麵麩（せいのめい）の中身を刮り抜いて短靴の代わりに履き、教会に出掛けた。神様にしてみれば、大切な麵麩のこんな罰当たりな使い方は、愛するあまり清らかに苦しみ嘆いて死児に麵麩の靴を履かせたあの母親より遙かに怪しからぬことだったから、高慢な姫が城から足を踏み出すと、前後で城と橋が轟音を立てて崩れ落ち、姫もともども地中に沈んだ。残ったのは橋の段に付けられた彼女の足跡だけだった。

六八九 呪われた城伯

エルボーゲン^(註)の市庁舎に馬の頭ほどの金属塊が陳列されている。住民はこれを呪われた城伯と呼ぶ。昔むかし、城にまことに冷酷残忍な騎士が居を構えていた。遠国からやって来た巡礼が客人権を懇請すると、必ずきつい言葉とひどいあしらいで追い立てたし、民草は厳しい笞の下に呻吟していた。ある時またしても疲れ切った巡礼者——ただし巫術師で秘奥の諸事に通じていた——が城門に来て、一夜の宿りを乞うたが、城主は荒唐しく怒鳴りつけ、とっと立ち去れ、と命じた。すると巫術師は、では永久に冷酷な（「硬い」）ままでおれ、と騎士を呪い、エルボーゲンの城伯はたちどころに前述の塊と化した。これは真つ黒で、叩くと金物の響きがする。皇帝軍の將軍ヨーハン・フォン・ヴェルトはひそかにこれを城の井戸に投げ込ませたが、幾歲月か過ぎ去ると再び引き揚げられた。この不可解な金属塊の成分を調べようと、これまで再再火を用いたり叩いたりしてみたが、溶けもせず、これっぽかりも傷つかずじまい。非力の者でもちよつと頑張れば大抵持ち上げられるのに、屈強な人間だと逆にほとんど動

かすこともできぬ有様。そして神に見放された大罪を犯した輩^{やから}となると、これはもうびくともしなかった。

六九〇 郷士^{ムシカ}ルートヴィヒ

エーガー市⁽¹⁵⁾近傍^{いわけ}に巖^{いわ}山^{やま}があるが、山上はなにやらおどろおどろしい雰^{ふん}囲^い気である。中肉中背のある亡霊^{むしやう}がかしこを徘徊^{はいかい}する。通称郷士^{ムシカ}ルートヴィヒという。この男、例の破廉恥^{はれんち}な境界標石移動犯の一人で、死後罰として自分が標石を動かした土地の境界をあちこちさまよわねばならないのだ。ある時は土気色の顔で、ある時は焰^{ほのお}に包まれて、ある時は徒歩、ある時は騎馬で。こうした亡霊^{むしやう}どもに出逢うのは不吉である。夕暮^{ゆぐ}れ刻、市門の外を散歩していてこの辺りに近づいた若い娘に郷士^{ムシカ}ルートヴィヒが寄って来て、こやつが生前少女たちに好んでやらかしていたように、胸をぎゅつと掴^{つか}んだ。その手が燃えるように熱かったので、娘は苦痛のあまりキャツと悲鳴を挙げた。すると郷士^{ムシカ}は消え失せた。家に帰って見ると、娘の胸は焦げたように黒くなっていた。彼女は「あたし、罰^{あた}が中つたんだわ」と喘^{あえ}ぎ、三日後死んだ。

六九一 ハンス・ハイリングの巖^{いわ}

カールスバート⁽¹⁶⁾の近く、同名の川の畔^{はた}にハンス・ハイリングという男が住んでいた。財貨を豊かに蓄えていたが、これらは神の賜物ではなく、主^{しゅ}なる神の下手くそな物真似屋、すなわち邪な仇敵^{あいつ}（「悪魔」）との盟約によって手に入れたのだった。悪魔はこやつに長年仕えなければならなかったが、ハイリングはファウスト博士が悪魔の

ヨーストをこき使った（DSB一四一）ように、下僕を苛め抜いたので、悪魔としてはご奉公にほとほと嫌気が差した。そのお札に悪魔は喉の奥から濛気を吹き掛け、ご主人様を悪臭まみれにした。そこでハンス・ハイリングは日がな一日ぶかぶかやっている煙草喫みよろしく芬芳と臭うようになった。さて、ハンス・ハイリングはかねてある綺麗な娘つこととことん惚れ込み、先方も満更ではなかったのだが、ハイリングがこうも鼻つまみな存在になると、縁組みなどもうちやら。その後娘は悪魔や鼻を刺す牡山羊みたいに臭くない他の男を結婚相手に選んだ。ハンス・ハイリングはこれに突拍子もなく腹を立て、婚礼を待ち受け、新郎新婦がお客様一同とにこやかに団欒している席に悪魔を引き連れて闖入、悪魔に向かってこう怒鳴った。「おい、悪魔、きさまにやあ暇をくれてやる。もう奉公しなくていいぞ」。「そいつを聞いて、おいらあ嬉しい」と悪魔は麵麴屋の煙突みたくもくもく煙を出し、「これであんたはおいらのもんだ」と叫んだ。それから婚礼客全部を新婚夫婦もろとも巖に変え、ハンス・ハイリングの頸をぐいと捻ってぽんと一蹴りし、エーガー川に突き落とした。以来彼の姿を見た者はいないが、巖に変えられた人人——抱き合っている新郎新婦、花嫁の父、婚礼の客たち——はいまだに立っている。

別の伝説によれば、ハイリングはかれに因んで呼ばれている巖を棲処にしていることになっている。巖の中には洞窟があり、彼はそこで小人族を支配しているとか。この巖は彼に因んでハイリングの巖という名である。そして他の巖とともにアイヒャ城とヴィルデナウ農園の間のエーガー河谷にある。トラープニッツのある女がボルニッツを通ってアイヒャ城の下方の森に漿果を摘みに行った。ところがにわかに日が暮れてしまった。しかし一軒の綺麗な家が見えたので訪れると、爺さんが一人、卓子に向かってなにやらせせと書いていた。女が「お宅に泊めてもらえますか」と訊くと、老人は「ああ、泊まってもかまわん」と言った。「ここはいいどこですか」と女が更に訊ねると「ハイリングの家さ。もつともここにおるのももう長くはない。わしの一族は大方いなくなつたし、呪

封は解けておる」。「あれ、小人たちを呪って石に変えたの、あんたさんじゃないですか。あの巖、いまだに呪われた小人の婚禮つていわれてますけど」。「黙って寝ろ」——最後の質問に老魔法使いはこう応えた。女は震えながらその言葉に従い、部屋の間で潜り込んで眠った。翌朝目を覚ますと、女が寝ていたのは巖の裂け目で、家なんぞ影も形もありやしない。急いで村に戻ると、何もかも様変わりしていた。見慣れぬ家、見知らぬ村人たち——山の惑わしに遭った人に起こったようなことが女に起こったのだ。彼女の名は教会記録簿に百年前行方不明になった者として載っていた。けれども女はキフホイザーの許婚同士（DSB四三〇）、クッテンベルクの鉱夫たち（DSB六六三）、大ベルケンティン教区で死人に招かれた御仁（DSB二〇四）よりは運が好かった。というのは百年経ったのにそれだけ年を取ったわけではなかったのだ。彼女は残りの人生を平穩に送り、別物の時代にうまく順応した。こうしたことはだれにでもあることではない。

ある年の聖ヨハネの祝日、羊飼いの少年が二人、鳥を捕まえようとしてハイリングスフェルゼンと巖の下部に小さな戸口があり、それが開いているのに気付いた。中に入った彼らは幾つもの櫃を目にした。一つは蓋が開いていて、貨幣が詰まっていた。他のは空っぽ。彼らは大慌てで詰め込み、脇衣嚢を一杯にしたが、やがて怖くて堪らなくなり、急いで巖から外へ出た。すると二人目の背後で扉がぱつたあんと閉まり、この子の靴の踵をもぎ取った。けれども彼らは無事に逃げ出せたわけで、お金をどっさり両親の許へ持ち帰った。

六九二 ツアイテルモースの森

ヴァンジーデルとヴァイセンシュタットの間、フィヒテル山地の近くに森が広がっており、その名をツアイテル

モースという。森の中にはツァイテルモース池^{ツァイター}があるが、民衆の伝承によれば、その辺りはなんとも不気味で、ありとあらゆる魍魎^{わうりょう}魍魎^{わうりょう}が出没する由。ある有名で学識高い人物が、宵もかなり過ぎたのに、森を抜けてこの池の畔^{ほとり}にやって来たところ、材木の山に子どもが二人坐^{すわ}っているのを目にして、こんなに遅くまで何をしている、早く家にお帰り、と声を掛けた。すると二人の子どもは大きな声でけけら笑い始めた。一方男はそのまま馬を進めた。そう遠くも行かぬ内、道の脇にまたしてもさつきと全く同じ子どもたちがいた。そしてまたまた高笑いした。男はぞっとして、もう話し掛けようとせず、無言で通り過ぎた。

別のこれも学識ある男が語っていわく。自分も晩秋のある宵、月明かりを頼りに徒歩でかしこの池畔を通り掛かり、上り坂に掛かった時、気分を引き立てようと精神を鼓舞する唄を歌った、と。

天空、大地、大気、海原、

これぞ造物主の栄光の徴^{しるし}。

我が魂よ、歌え、いざや、これらを誉め讃^{たた}えよ。

すると突然濃い霧に取り巻かれた。そして馬に乗った者どもが周囲を駈^かけ巡るような音がした。しかし自分は——と彼は言う——勇敢に歌い続け、二節も三節も歌い、このような四節目に掛かった、と。

行け、鳥群が対となり、

大気を突いて飛翔^{ひしょう}すること。

してまたこの四節目の次の歌詞

雷鳴、稲妻、霧、雹、風、
これぞ神意の僕なり。

を、何もかも神様にお任せして、怖じ恐れることなく高らかに歌い切ると、煙霧は見る見る背後で散り散りとなり、ツァイテルモース池の向こうへ消え去った。そこで男は唄を最後まで歌ったのだ、と。

ああ、我が神よ、我が魂は

素晴らしき汝を感じまいらす。

汝の存在、我が在りかたを

常に我が心に記したまわれ。

六九三 ブツエンロイトの夜の獵師

ヴンジーデルとレドヴィヒの間にブーゲンロイトとかブツエンロイトとかいう山林がある。噂によればここは森の精にして地獄妖怪が狩りをする本家本元の獵区で、こやつは妖魔の同勢を引き連れ、ツァイテルモースでもだが、高いシュタイン山、レックヴィッツ、全フィヒテル山地、更には犬の橋一帯で兇暴な狩獵を行う。この山

林の名だが、これは——この界隈かいわいの夥おびただしい地名と同様——開墾ロイテンする reuthen、開拓アウスローデンする ausroden に由来するのでなく、騎行ライテンする Reiten から出たのかも知れない。この妖怪が夜の獵師として界隈かいわいを騎行するからである。妖魔は、この邪な精霊は、三本足の馬に乗り、地獄の獵犬どもにワンワン、ギャンギャンと取り巻かれて突き進む。この狩獵妖怪は荒れ狂う同勢と共に、フレンキツシエ・シュヴァイツ〔「フランクンのスイス」^(註)〕といわれる地域の異教の町を越えて行くので、同地の夜旅はごく安全とは言い難い。

六九四 ナイラ村近くの小人の洞窟

ゼルヴィッツツヴェルクとマルスロイトマルスロイトの間にナイラ村ツヴェルクがあるが、数百年前同地の——いまだにある——幾つもの洞窟の一つに小人たちが棲すんでいた。穴はいまだにあるが、小人たちはもういない。コーマンという名の農夫が二頭の馬を型すきに付けて畑を耕していると、おかみさんが焼きたての麵麩ペンを朝食に持って来た。彼女は布切れに包んだこれを畑の畔くわに置くと、自分は牧草地に出掛けた。すると小人の女ツヴェルクが農夫に近づいて来て言うには「あんたはまだ腹が減つてにやあだら。けんどあたしの子どもらはひもじがつてる。うちの麵麩ペンはまだ窯かまの中だずら。あたしの子どものためにあんたの麵麩ペンを貸してくんな。昼までにやあ返きこすから」。——農夫は二つ返辞でちび女に麵麩ペンを渡してやり、自分は昼まで我慢することにした。もつとも女が約束を守るかどうか見届けたいのも山山だった。するとなんとまあ、女は時刻を違たがえず、村の教会の正午を知らせる鐘が鳴り止んだ途端、雪のように白い布切れにくるんだまだほかほか温かい麵麩菓子ペンケイキを持って来て、こう言った。「さあさ、遠慮無く喰くってくん。布切れはうつちゃらかしといてかまわにやあ。あたしや、きつと取りに来るから。さて、あたしら、もう二度と会うこたあにやあ。世の中、

悪くなる一方だら。あんたらと来たら、呪ったり、誓ったりがどんどんひどくなるし、いつの日曜の朝でも稔り具合を見ようって、畑に出て来る始末じゃあ。⁽¹⁸⁾ あんたらは鍛造工場を次から次へと建てる。ガンガン、ドンドンが絶え間もありやしにゃあ。だからあたしら、この土地からおさらばせにゃならにゃあ。もう長あこと棲んでたけんど。⁽¹⁹⁾ 言い終わると女はいなくなり、二度と現れなかった。農夫が麴麴や布切れの中に何か好い物を見つけたのかどうかは語られていない。

かつてナイラ近くの小人洞へ、ある日曜の午後、農家の若い有象無象が潜り込んだことがある。中が見たくて矢も盾もたまらずにね。畑二、三枚ほどの長さの通路を抜けると、人の背丈ほどの洞窟に出たが、壁にはたくさんちいぢやな扉が付いていて、小部屋がずらりとあるようだった。一同突然ひどくおっかなくなり、慌てて外に逃げ出したが、何日かの間具合が良くなかった。

六九五

主なる神の巖

ゼルブとティアーシユタインの間、エーガーの川縁で、街道の傍らの地面から大きな巖がによつきり顔を出している。これは男が巖の中へ——さながら鑄型に嵌まるように——横たわることができるような形をしている。四肢の形がごく見事な釣り合いを成して、どこぞの工匠が蠟に刻み込んだといった具合に見える。伝説によれば、我らが主キリストがこの巖の上でお休みになり、巖が聖なるお体なりに凹んだのだ、とか。かのルールライの巖に黒黒と焼き付けられた悪魔の姿（DSB六九五）のと同じく対極である。

似たような捺し型が、プラークからケーニヒスザールへ半道行ったプロコピウス聖者の洞窟——巖山深くに通じ

ている——にある。もつともこの洞窟に棲んでいたのはもとより主なる神ではなく、悪魔の一群で、こやつらはプロコピウス聖者に追い出されたのだが、出て行く時、己らの徴である角、有翼龍の鉤爪、牛や馬の蹄、無翼龍の尻尾などを形見に遺したのだ。

六九六 フィヒテル山とフィヒテル湖

フィヒテル山地の頭領にして王というべきフィヒテル山頂にフィヒテル湖と呼ばれる評判の良くない底知れぬ湖がある。申さは丁度、テューリンゲン山地なるシュネーコプフ山上の悪魔の環、フランケン邦レーン山地の黒い沼、スイスのフラクモン山上のピラトウス湖、ヘッセン邦マイスナーにあるホレ夫人の沐浴場その他のごときもの。この湖は——ピラトウス湖もそうだったが——かつて水面が開けていた。しかし後世になると——ピラトウス湖もまたしかり——ゆらゆらと不安定な湿原に覆われるようになり、今ではゼーローエと呼ばれている。この地方では湿原の下に沼がある土地をローエと称するからである。フィヒテルゲビルゲからは四本の川、すなわちマイン、ザーレ、ナーベ、エーガーが四方向へ流れ下っている。内マインとナーベは直接フィヒテルゲゼーから発する。これらの諸川の頭文字を続けるとM E N Sとなる。マインは西へ、ナーベは南へ、エーガーは東へ、ザーレは北へ向かう。マインはラインに、ナーブはドナウに、エーガーとザーレはエルベに合流する。ヴァイセンシュタット近くでエーガーはある湖を経由するが、伝説によれば、ここはその昔ある聖職者が——シユヴァンテにきた貧民がそうした（D S B 三五五）ように——蛙たちを黙らせたところ。もつとも、こうした奇蹟を起こしたのは伎倆に長けた放浪者で、蛙たちが説教中邪魔するので困っていた聖職者のためにやったのだ、という異説もある。

それからこれも不思議な話だが、このヴァイセンシュタットの湖に投げ込まれた蛙はすぐさま慌てて跳び出す、また、この水を桶おけに二、三杯、どこか他の池に注ぐと、その蛙も同じように黙らせる効き目がある、とか。——かつてエーガーはその川砂に金剛石ダイヤモンドを、マインは真珠を、ザーレは黄金を、ナープは銀色に輝く小石を含んでいった。フィヒテルベルクには広く知られたこんな諺ことわざがある。「牛飼いが牝牛めうし目掛けて牛なんぞより値打ある石よく投げる」。しかしながらこうしたことは皆昔むかしの黄金時代にあつたこと、起こつたことだ。黄金時代が再来するか、それはいつかなんて今やとんと分らない。フィヒテルゼーでは夜の狩人が水浴びをする。その同族であるホレ夫人がヘッセン邦マイスナーに（DSB七五七）、悪魔がシュネーコプフ山上に、リユーベツアールがリーゼンゲビルゲにその沐浴場を持っているように。これら四人のお歴々が同じ場所、同じ時に水浴びしないというのはまず結構。さもないと、この世にはもっと多くの不祥事が起こるだろう。そうでなくたって、悪魔とその手先どもが一つ風呂に入ると、ろくなことはありやしない。

六九七 ルーフス城の財宝

フィヒテル山地ゲヒルの峨峨ががたる高峰——どの頂きにも大抵、今は瓦礫がれきと化している騎士の城がある——の内でも、アレクサンダーバートの町まちを見下ろすルーフス（ルークス、ルール、ロース）城ほど財宝伝説、宝探し伝説に富んでいるところはない。崩壊した穴蔵の大きな階段の下に高さ一肘尺幅一肘尺の銅釜どうがまに入った莫大な財宝——ぎっしり一杯のグルデン金貨がある。釜には銅の器うつわが載っているが、中にはこの上なく大きな真珠と数数の極めて貴重な寶石を鑲めはめた黄金の王冠が納まっている。かつてこの城に住み、山地に君臨していた盜賊騎士たちがこの財宝を集

め、見つからないよう隠したのだ。彼らはある王からこの王冠を奪い、目に見えないようにした——コシュート閣下がハンガリアの王冠をそうしたように。小人のような体つき、隻眼で跛者、黒い僧衣を纏った小坊主だけが王冠と件の黄金の詰まった釜をルーフスブルクで見つけ、掘り出すことができる。公現の祝日か黄金の日曜日、ないし三位一体の祝日——これらの日にかの小坊主は黄金の日曜日生まれの者たちに姿を見せる——であれば、黄金の日曜日生まれの者にこれができる。これまで数えきれぬ回数、宝探しの面面や鉱夫たちがルーフスブルク下の巖の裂け目を幾つもほじくり返したが、全くの無駄骨折りだった。

六九八 牝牛の頭山麓の亡霊教会

フィヒテル山の傍に牝牛の頭なる山が巖と森に覆われた首を擡げている。言い伝えによればここには黄金、財宝が豊富にあるとか。かつて南国者たちは頻繁にこの山深くを掘りまくった。山上の巖の裂け目の一つにある農夫が潜り込んだところ、横穴に行き当たった。横穴の入り口には知らない言葉で書かれた本が一冊、手袋一組、拳銃一挺と共に置かれていた。腹這いになって穴の中の様子に聴き耳を立てると、掘ったり砕いたりする音が聞こえた。が、灯火は見えなかった。そこで農夫は見つけた物を全部手に取り、拳銃を発射し、拾得物を官憲に引き渡した。フィヒテルベルクのある老灰焼き人の話に曰く。「ある年の黄金の日曜日のこつたが、雨が降り出した。そこでわしゃあ牝牛の頭に駈け登った。灰の始末をしにな。すると山下のビショーフスグリューンで鐘の鳴る音が聞こえた。その時わしはある巖壁の傍に来とったが、これがさっと開いた。中へ入ると、祭壇が立っておった。これが全部黄金でできとってな、その上に点つとる燭台の明かりでどこもかしこもキラキラ光とった。そこでわしは、麓

のビショーフスグリューンで礼拝が催されるたんびに、山の上じや亡霊教会ちゅうか、山の教会、森の教会ちゅうか、そういうもんが始まるって、以前聞いたことがあるのを思い出した。で、もう一遍見回すと、金や銀が氷柱^{つらら}みたい天井からぶら下がって、真珠や宝石がうちの煙突の繋いだ玉葱^{たまねぎ}みたいにごろごろ積み重なった。亡霊は全然目に付かなかったけれど、わしは自分が独りぼっちなのがおっかなくなつて、外へ走り出した。すると、後ろで、山が崩れるようなガラガラゴロゴロちゅうおつそろしい音が聞こえた。わしやああのすんばらしい眺め——こりやあ黄金の日曜日と聖ヨハネ^{ヨハニス}の祝日の朝にだけ時時人の目に見えるだが——を女房どんにも見せてやろうと連れて来た。けれど、戻ってみると、巖壁はびっしり閉まつて、何一つ見えなんだ。するとまあ囁^{ささや}めがほざいたわな。『あんたこそ牡牛^{オムセンコブ}の頭だよ。なんだって亡霊教会から黄金^{きん}の氷柱とか宝石の束とか一つでも持ち出さなかったのさあ。だって、お宝が見えたんなら、それが授かったってことだからねえ』ってな。だがなあ、なんにも貰^{もら}えん物乞いは、懷^{バシ}の麵麴^{メンコク}さえ失くしちまう⁽¹⁸⁾〔「貧すりや鈍す」ちちゅうでねえか〕。

六九九 ルードルフシュタイン城の地獄

フィヒテル山^{ベルク}と牡牛^{オムセンコブ}の頭の隣峰シュネー山^{ベルク}の北斜面にはかつて、ヴァイセンシュタットの方角に向かつて、騎士の城にして盜賊城^{ラウフルク}たるルードルフシュタインないしロレンシュタイン城が建っていた。その場所はいまだに城山^{シュロスベルク}と呼ばれている。フランケン^{フランク}の宮中伯ルードルフが、八五七年、城壁も塔も人力を用いて、累累たる巨巖^{きやがん}上に城塞を築いたのだとか。建設者はシュヴァーベン出身の皇帝ルードルフだとの説もある。ヴンジーデル周辺にはかつて十二から十四を下らぬ盜賊城があり、それらの住人は山地の強風よろしく旅する商人たちの懷から金銭を巻き上げ

た。盗賊どもと妖精らは仲良く仲間になってろくに人も通わぬ界隈を広く不安不穩にした。ルードルフシュタイン城の下方にあり、不気味な断崖に囲まれている森の一面は地獄と呼ばれている。ここはその昔盗賊城ルードルフシュタインとヴァルトシュタインの真ん中に位置しており、旅人たちはここで覆面をした森棲まいの鮫どもから加えられる呵責——これに較べれば森の精や地獄の業火から受ける苦しみなんてのは大したことはない——にしばしば耐えねばならなかった。森の精というのは、森中が壊滅するかのような轟音を立てながら、焰を吐く怪獣の姿で出現したものだ……。——ザクセンのある狩人が、地獄での魔物どもの跳梁ぶりとんと知らぬまま、見つけた獵獣がヴァルトシュタイン城の方へ逃げて行くのを追跡した。城山に登れば登るほど、いろいろな獵獣の姿が見えて来たが、どれもこれも城の廢墟に逃げ込み、射程内に入るのは一頭もなかった。追いながらとうとう城門を潜った時、突然濃い霧と共に巖やら壁やら藪やら樹木やらが周りを取り囲み、城の中庭は、全地獄が解き放たれたかのように、ブウブウ、ギアギアという騒ぎとなり、ピシリパシリと鳴る鞭の響き、ジャランジャランと鈴の鳴る音、犬どものワンワンキャンキャン、喚声、高笑いで沸き返った。そして荒れ狂う獵師が荒れ狂う同勢を悉く引き連れて物凄まじい形相で現れたので、狩人はくたくたと地面にくずおれ、すっかり氣を失った。正氣に返ると、辺りは真つ暗で、山下のロイマースロイト村で鐘樓の時計が十二時を告げた。

七〇〇 ヴァルトシュタイン城の煉瓦

フィヒテル山に数あるおどろろしい巨巖の頂きやその狭間に点在する廢墟の内でも美しいものはヴァルトシュタイン城である。ここにはかつてシュパールネックの殿たちが蟠踞していた。彼らは辺り一円に、余所者たち

から金を召し上げる拠点——いわば貯金箱——を幾つも所有しており、こうした所業は苛烈な攻撃で留めを刺されるまで続いた。ある貧しい日雇い人夫がかつてヴァルトシュタイン城の内いまだに残っている古い城壁のすぐ近くで木を伐つていた。すると男の小人がやって来て、至極にこやかに煉瓦を一つ差し出し、身振り手振りで、これを家を持つて帰れ、と分からせた。伐採人は当惑して、日向の牛酪よろしくぐだぐだと尻込みした。口はあんぐり、目は瞠り、煉瓦をひねくり回し、相手を窺ったが、とうとう「なんだっておらがこの煉瓦をうちに持つて帰んにやなんねえだべ」という大疑問を思い付いた。しかし男のほんくら頭ではどうにも解答が見つからなかったので、煉瓦をくれた者に訊いてみようとした。ところが、なんとまあ、小人はとくに消え失せていた。人夫はまたしても煉瓦を引っ繰り返しおっ繰り返して、「これが煉瓦乾酪だったらなあ、その方がずっとええのによ。こいつを手や服に擦り付けていたって何の得にもなんね。莫迦なことあ止めだ、止めだ」。——そこで男は煉瓦を繁みに抛り込んだ。家に戻ると、おかみさんがびっくり仰天して金切り声を挙げた。「あんれまあ、おめえさま、煙し塩豚の皮みたようにてかてかしてるでねえか。だれかに火ん中で金鍍金されたのけえ」。——つまり、手や服にくつついていた煉瓦の粉は純金の粉だったわけ。ピュウツ。伐採人夫の速かったのなんのつて。またまたヴァルトシュタインへ駆け登った。そうして夜が更けるまで、黄金の煉瓦はどけえいったあ、と繁みの中を探した、探した。——けれども、やれやれ、ご苦労様、どこにも見つかりやしなかった。

七〇一 ヴァイスドルフの鑓目立て職人

ヴァイスドルフに男が住んでいた。年季の入った鑓目立て職人なのに稼業はうちやらかし、別のもっと儲けに

なると思つたこと、すなわち降霊術に励んだ。今日ではもう召喚されたがらないけれども、当時はまだ呪文で呼び出される魔物がいたし、この目立て屋の場合、かの村塾のちんぴら先生とは違つていた。このお師匠さん、やつぱり魔術に専念していたが、「本当に妖魔を呼び出すことができるのですか」と訊かれ、「できますとも」と居丈高に返辞をした。けれども「それでもそもそも妖魔の方があなたの召喚に応じて出て来るのでしょうか」と重ねて訊ねられると、聞こえたのは口籠もつた「いいえ」だった。——さて一方、目立て職人に召喚されると精霊は本当に出現した。目立て職人は長身瘦軀、ぞつとするような風貌だった。獺皮製の擦り切れた背囊を背負つていて、見掛けは枢密顧問官より鼠捕り男に似ていたが、能力も枢密顧問官以上だった。大人にも子どもにも恐れ憚られたが、これはひとえにいかかわしい仲間とつきあつていたからである。騷霊がどこかに出現すると、鑪目立て屋が呼ばれた。彼が到着すると、すぐ騷霊も登場、目立て職人がこれを祓うと、霊はおとなしく獺背囊の中に潜り込んだ。丁度泥棒の親方のお伽話で司祭と村塾の師匠が大きな袋に潜り込んだように。背囊に入れた騷霊を全て妖魔狩人は捕獲した猫みたいになつた。ヴァルトシュタイン城へ担ぎ上げ、悉くそこに呪封し、きちんと紀律を守らせた。この連中はしばしば城の中庭に置かれた大きな石の卓子を囲んで鉄の骨牌で賭け事をした。この骨牌は随分熱かつたに違いない。なにしろ石にその痕が焼き付いているのでね。

七〇二 キンコン小鐘

ヴァルトシュタイン城——いや、エップレヒトシュタイン城でのことだ、と言う者もある——の礼拝堂鐘楼には祈禱を告げる小さな鐘が下がっていた。年に何日か決まつた日にその音が極めてはつきり聞こえるので、山麓のツエ

ルではしばしば同地の鐘楼の鐘だと勘違いするほど。鐘の響きを聴いて、山に登ってみた者も少なくないが、山上には何も無く、音も聞こえないのだった。森で働いている夫に昼の弁当を持って行ったある女が、鐘声を耳にして音源を突き止めようとした。城山に登って城壁の一角を廻ると、扉が開いている荘厳な亡霊教会が見え、その上にそそり立つ鐘楼でキンコン小鐘が揺れていた。教会内からは風琴の調べと聖歌の合唱が聞こえ、祭壇に向かって司祭が立ち、床には鎧武者たちと白い面紗を被った女性らが跪いていた。哀れな女は何かやみくもな気持ちに駆られて、やはり跪き、これら善良な亡霊が崇めている対象に塵埃の中でもろともに祈りを捧げねば、と思ったが、同時に自分がこの会衆の仲間ではないことを感じてぞっとした。けれども信心に発する敬虔な衝動からやはり神聖な気持ちになり、合掌して跪いた。その時祭壇の司祭が振り向いた。その氷のように冷たく、厳しい目が女を捕らえると、彼は腕を上げ、虚ろな声音で「災いなるかな、災いなるかな」と叫んだ。——その途端、祭壇も司祭も風琴も合唱隊も男たちも女らも教会の装飾も消え去り、小鐘は鐘楼から落ちて女の前の床に深く沈んだ。嵐が捲き起り、雷鳴が瓦礫の周りに轟き渡り、城壁の上には数世紀このかた生い繁っている樹木が元通り立っていた。すっかり惑乱し、半死半生のていたらで、女は夫の許に引き返したが、長いこと物も言えなかった。夫は嵐にしろ雷雨にしろ耳にしておらず、空は快晴だった。——震えながら家によりめき戻った女は、三日後墓場行きとなった。

七〇三 いなくなつた子ども

これはまた別の貧しい女の話だが、小さな子どもを抱いて森へ行き、エップレヒトシュタイン城の廢墟に入つた。女はそこで子どもを草の中に坐らせ、自分は苔桃などを採した。突然目の前に素晴らしい教会が見え、幾つか

の扉が開いていた。教会内には献金盤が立っていて、これが金貨で一杯だった。女は急いで駆け寄り、金貨を入れるだけ前掛けにざらざらと掬い込んだ。矢のような速さで家に帰ったのはいいが、金貨は手に入れたものの、子どもをすっかり忘れていた。家に着いてやっと頼る者とないちびちゃんを思い出した女は、飛ぶように山へ引き返した。——けれどもそこには子どもも教会も見つからなかった。女は子どもの名を呼びながら、瓦礫の間を彷徨い歩き、わんわん泣き喚いたが無駄だった。子どもはそれっきり消え失せ、行方不明になってしまったのだ。哀れな女は毎日山へ登って泣きながら子どもを探した。金貨は家の櫃にちんと収まったまま、女はそれに触りもしなかった。そんな物のことなど考えたくもなかったのだ。なにせ代価が高過ぎた。子どもと取り替えっこだったのである。——こうして丸一年が経ち、苔桃がまた熟した。女は漿果を摘みに再び城の廢墟に近づいた。二重の苦痛を抱えて。なにしろあの不幸と喪失が起こったのは丁度一年前のことだったから。——すると突然——女はほとんど我が目を信じられなかったが——またしてもあの教会がありありと出現した。そしてやはり金貨が盛り上がって燦めいている献金盤の傍に潑刺とした愛児が坐って目を擦っているではないか。驚喜した母親は駆け寄って抱き締め、好い子好い子して外へ連れ出した。金貨の山なんぞには目もくれず。追いつけられはしないか、だれかが子どもをまた攫おうとするんじゃないか、と最後に一度振り向くと、教会は霧の影のように消え失せるところで、再び荒寥とした廢墟になって行つた。さて母親は無上に幸せになった。それに靈界が恵んでくれた奇蹟の金貨は無事に残っていたので、以後楽しい暮らしを送り、子どもを神様の誉れになるように育て上げた。

エップレヒトシュタイン城に纏わる伝説にはまだこんなものもある。年に一度——もつともいつと日は決まっていないが——山下のキルヒエンラミッツの祭壇で牧師が主の祈りを唱え、その祈りの間ある巖がぱっくり口を開け、金貨のうずたかい山を見せる。けれどもしかあらかしの声が響くと、巖はまた一年間閉じてしまう。巖が開

いているのを見たら、素早く何かを金貨の上に投げなくてはいけない。そうすれば主の祈りが続いている間は金貨を掴み取ることができる。しかしあんまりぐずぐずしていると、巖はがっしり閉じ、両手、あるいは頭を挟まれてしまう。

七〇四 静かな草原

フィヒテル山地からマインの野へと九十九折りの道を下って行くと、隣接する山国——多くの者はこもフィヒテルゲビルゲの一部と考え、その美しい自然の景観のゆえにフレンキツシェ・シュヴァイツ（＝フランクンのスイス）と称している——に入る。この地域は洞窟と伝説に富む。鱒や蜷蛄がたくさん棲息しているヴァーゼント川に貫流されている。シュトライトベルク、ナイデック、ドラマウスないしドラマイゼル、ラーベンシュタインその他城の廃墟がまた夥しい。ここで道はムッゲンドルフのすぐ近くで繁みに覆われた山並みに穏やかに囲まれた美しい草原をも通る。この草原はとりわけ民衆に静かな草原と呼ばれている。この名称の起源について伝説はこう語る。ルター博士がコーブルクに滞在し、アウクスブルクの帝国議会に出席していた（一五三〇年）友人メランヒトンが戻るのを待ち受けていた折、博士はこの辺りへ遠出をし、ムッゲンドルフにもやって来た。この偉人の名声が先触れとなったので、民衆は総出で、その姿を見よう、あわよくば声を聴こう、とここへ急いだ。いよいよ彼が到着すると、大勢が押し合いへし合いその周囲に集まり、畏敬の念やら好奇心やらに駆られて、一斉に話し掛けた。ルターはこの草原に立ち止まり、片手を挙げ、「静かに」と叫んだ。——周辺は墓のようにしんと静まり返り、物音一つせず、唇一つ動かなくなった。するとルター——この神と民草の力強い男——は語り始め、黙りこくって周り

に佇立^{たちりつ}している聴衆を火のような言葉で深く教化した。彼が語り終えた時、そんなじよそこらの大衆演説家・原っぱ弁士^{たぐ}の類なら第三天にまで吹き上げてくれようあの酔ったような喝采^{かつさい}は起こらなかった。拍手も、素晴^フらしいの叫びも無かった。辺りは静まり返ったまま、終始一貫しんとしたままだった。聴衆は真摯^{しんし}にこの人を畏れ、おそらくそれと意識せずにネヘミアの預言にある「汝^なら黙^{もく}せよ此日^{このひ}は聖きぞかし^{（聖）}」を心に感じたのであろう。——そこで人はこの浄められた土地を静かな草原と名付けたのである。

七〇五 異教^{ハイザン・ユダト}の町とウィーテの洞窟^{ドゥク}

ムッゲンドルフ教区に入れられている小村アルバーンドルフの近くにぐるり数千歩の空き地があるが、土地の者はこれを異教^{ハイザン・ユダト}の町とか犬の橋と呼んでいる。そこでは魍魎^{ちやうりやう}魍魎^{ちやうりやう}や荒れ狂う同勢^{ダス・ウェンゲン・デ・ヘー}の姿や音がしばしば見られまた聞かれる。昔の異教時代の銅貨や極上の銀貨が見つかったこともある。平地には漏斗状^{じょうじょうじ}の穴、壁の名残がいまだに多い。そこからほんの十五分かつ三十分離れて洞窟^{ドゥク}山がある。かつては空っぽ^{ダス・ホーレ・ロッテ}と呼ばれたが、今ではある小説に因^{ちな}んでオスヴァルトの洞窟^{ドゥク}といわれることも少なくない。山の表面や地下には種種様様な割れ目があり、とりわけウィッツェン洞窟^{ドゥク}には天然の水盤があり、この地で偶像神を崇めていた異教徒たちはそこで斎戒沐浴^{さいかいもくよく}をした由。この偶像神の名はウィッテあるいはウィーテで、巨大な森林神だったようだ。なにしろウィーデwideというのは太古のドイツ語で杜^{もり}および神殿のどちらをも表す語——杜こそが神殿なのだから——だったし、ウィーデ自体「聖なるもの」なる意味があった。さればこそヴィヒトWichtは四大の精霊なのであって、必ずしも小人^{ツッフェル}ではないのだ。さればこそ古い人名にヴィティヒョWitchoやウィッテヒントWittehindがあり、現代ドイツ語にヴァイエ

ンweihen「＝浄める、神聖にする」があり、自然神ヴィーテの洞窟に祀まつぎの水盤がある道理。このヴィーテ洞窟なる名称が後に変転してヴィッツェン洞窟へいしと訛なまったのだろう。ヴィッツェン巖シユアインという、森の豊かな地域にあって大抵伝説が纏まとわっている数多くの巖もこうしたことを示唆している。更に、魔物や神秘的魔女的存在を太古ビルヴィーツェンPlwizenとかビルビッツェンBilbitzenとかと呼んだことを想起するなら、こうした示唆もあながち的外れではあるまい。もつともヴィーツェはより高い存在だが——。ヴィッツェン洞窟はバイロイトに向けた上の洞門から下部の口まで延長五百歩に及ぶ。物情騒然たる動乱時代、この洞窟は周辺の住民にとって避難場所として役立った。昔あったというヴィーテの像についての話は少なくないが、実在したのかどうか定かではない。あるいは後世の贋作がんさくだったのかも。

七〇六 エッペラ・ガイラ

ムッゲンドルフ近くのドラマイゼル城（四）にかつて一人の騎士が居を構えていた。その名はエッペリン・フォン・ガイリンゲン。（四）彼は強大な魔法使いでもあり、空飛ぶ馬を持っていて、これに跨またり、険しい巖壁いわかべをあちらへまたこちらへ、干し草運びの荷車を草一本にも触れず、ヴィーゼント川を——かのヴィッティヒがヴィザール川を越えたように——足も濡ぬれさず、跳び越えた。元来の根城はガイレンロイトだったが、その他にも邦中くにじゅうに多くの城を持ち、城から城へと魔法の馬に乗って風のように飛翔ひしょうした。ドラマイゼルからムッゲンドルフへ高い巖山と深い峡谷を越えて騎行したが、だれにもそんな真似はできなかった。エッペラインはニュルンベルク市民を殊の外憎んでおり、身の回りを掠奪好きな一味徒党で固め、騎馬隊の先頭に立ってニュルンベルクの市域にしげしげ乗り込んだ。そこ

でこんな童唄が歌われた。

騎馬で打ち立つニュルンベルクの仇、

ドラマウスのエツペラ・ガイラ。⁽¹⁴⁾

あるいはまた。

ドラマウスのエツペラ・ガイラ、

いつも十四人連れ、騎馬で行く。⁽¹⁵⁾

十四という数字はおそらく古代から東フランケンでは神秘的な意味を持っていたらしく、十四聖人もそれゆえである。その首——ニュルンベルク市民はなんとか手に入れたがった——に賞金が掛かったエツペラインがかつてニュルンベルクの城塞を攻撃したことがあるが、その時城内に封じ込められ、ひしひしと圧倒される、と看て取るや——なにしろ市民らは城門を閉ざし、もうすぐさまを絞首刑にしてやるぞ、と呼び掛けたからだ——彼は馬の尻を剣の平で打って駈り立て、

ニュルンベルク衆にや吊しはできん。

捕まえとりやあ別だがね。⁽¹⁶⁾

こう叫ぶなり、駒に拍車を掛け、物見塔（ルイグレンズタウ）近くの城壁へ進み、壘壁と濠（ほり）の上の恐ろしい深さを跳び越え、無事に逃れ去った。後でニュルンベルク市民は馬が跳躍する際鋸壁（きょき）に残した蹄鉄の痕を眺めて感嘆しきりだった。上首尾の奇襲や大胆な計略を少なからず重ねたエッペリンはある時ファルンバッハにやって来て、旅籠（はたご）で酒を飲んで眠っていると、密告でこれを知った敵勢が宿の周りに車陣（くるまじん）を組んで包囲した。すると彼は馬に跨り、車を八台までは跳び越えた。しかし「九台目にて」——と古謡は彼をこう歌う——「越ゆるを断念」。進めなくなった彼は——その昔ドルドーニュのラインホルトが愛馬バイヤールをそうした（DSB 一三三）ように——魔法の乗馬を犠牲にし、刺し殺すと、囚われの身となった。逮捕はポストバウアー（ポスター）でのことで、小都市ノイマルクト——ニュルンベルクとレーゲンスブルクの間にある——で斬首された。彼の思い出ははまだ忘れられることなく生き続けている。

七〇七 フランケンタールの見霊者

有名なラングハイム修道院（ラングハイム）の附属農場の一つ、リヒテンフェルス（リヒテンフェルス）とバンベルクの間にあるフランケン谷（フランケンタール）の近くで、一四四五年のこと、ヘルマンという名の羊飼いの若者が群れの番をしていた。向かいの山にあるバンツ修道院から晩禱（ばんたう）を告げる鐘が美しいマイン河谷へと響き渡ると、群れを追って山の高みから家路に就こうとしたが、その時道の脇で子どもたちの泣き声をするのを耳にした。見ると小さな男の子が独りぼっちで畑に坐（すわ）っている。そこで傍に近づいたところ、輝くように美しい子で、若者にいとも愛らしく微笑（ほほえ）み掛け、その直後姿を消した。羊飼いはその場から立ち去ったが、振り返ると、なんとまあ、子どもは元通り坐っており、前にも増して素晴らしい容姿で、傍らには二本の蠟燭（ろうそく）が点（とも）っていた。ヘルマンは急いでもう一度愛らしい幻影（まも）の許に引き返したが、またしても消え失

せた。心休まらぬまま若者は羊群を追って帰宅し、両親に自分が見たことを話した。しかし両親は信じてくれず、莫迦なこと喋くるでねえ、と決めつけた。それでも彼は目の当たりにしたことをある敬虔な司祭に打ち明けた。司祭は、今度また幸いにもそうした幻影に逢えたらどうすべきか、教えてくれた。出逢いはやはり起こった。もつとも漸くその翌年のことで、場所は同じだった。ただし遙かにこの世ならぬ雰囲気で。輝く後光に取り巻かれた小児の胸には赤い十字が印され、ぐるりには更に十四人の天童が侍り、全員が赤と白——古のフランクェン邦の徴色——の衣装を纏っていた。ヘルマンは訊ねた。「父と子と聖霊の御名により。あなたがたはどなたですか。そして何をお望みですか」。すると神神しい子どもは答えた。「わたしはイエズス・クリストウス。してこれなるは十四救難聖人ぞ。我らはここに住み、憩い、そなたたちが我らに仕える限り、そなたたちに仕えよう」。——それから幼子イエスはふわりと浮かび上がり、十四救難聖人はイエスと共に天へ昇って行つた。次の日曜日の同じ時刻、フランクェンタールの見霊者は二本の燃える蠟燭が天から例の場所に降りて来るのを目撃、向こうからやって来たある女性も同様にこの奇蹟を見だし、蠟燭がまた天へ昇るのも見た。そこで羊飼ひヘルマンはラングハイム修道院長の許に行き、院長と修道院の師父たちに繰り返し起こる現象を告げた。かくしてその山の高みに礼拝堂が建立され、間もなく格別な霊場として広く評判となった。そこでは奇蹟が幾つも起こり、遠近から巡礼者がどつと押し寄せ、十四救難聖人に祈りを捧げだし、礼拝堂も潤沢に贖宥状を賦与された。ある教団は十四救難聖人に因んだ教団名を付け、ヘンネベルク伯はこの教団のために騎士修道会を創立した。皇帝フリードリヒ三世は自らここへ巡礼、ある誓願を果たし、アルブレヒト・デューラーも一五一九年ここに来了。良い時代にも悪い時代にもずっと変わることなく十四救難聖人巡礼教会は高い名声を承け続け、ますます壮麗な建築となり、隣に首席司祭館も設けられた。教会の長堂と翼廊が作る十字型の中央に三層の祭壇がそそり立ち、その下には人が入れる空間があつて、これはフラ

ンケンタールの見霊者があの幻影を見た場所の上に位置する。この場所で祈り、懺悔し、誓願を立てるべく、毎年数千もの人人が高みにある美しい教会へ巡礼に来る。十四救難聖人とはゲオルギウス、ブラシウス、エラスムス、パンテレオン、ヴィトウス、クリストフォルス、ディオニシウス、キリアクス、アカティウス、エウスタキウス、アエギディウス、マルガレータ、バルバラ、カタリーナである。フランケンタールの見霊者である敬虔な羊飼いヘルマンの思い出は今に至るも朽ちることはない。

七〇八 ポーディカ姫

小都市リヒテンフェルスを見下ろす、今日いまだに「お城ブルグのあったところ」と呼ばれている地点に、古いメラン伯爵家の城の一つがあった。かしこにはシャウムブルク家——この地方地生えの貴族一門——のごく広く枝分かれした分家の一つの息女ポーディカの安らぎを得られぬ亡霊がいまだに彷徨さまよっている。シャウムブルク家発祥の城はかつて小都市シャルカウを見下ろし、コーブルクとアイスフェルトの間にあった。今日でも遺構が僅かに残っている。姫にはクネムントという許婚者いいなすけがあつたが、バンベルク大司教区のシエスリッツ近郊で遂に決戦に至った重大な私闘フェイトに従軍した。その際ポーディカ・フォン・シャウムブルクは夫と定めた若者に自分の手袋の片方を持たせ、相手は、生死いずれにせよ我が信実まことの証としてこれをお返ししたと誓った。——しかし若者は手袋を持ち帰らなかった。シエスリッツの戦いで信実ある若殿クネムントは斃たれ、ポーディカ・フォン・シャウムブルクはそうした凶夢を見てひどく衝撃を受け、懊悩おうれうのあまり息を引き取った。以来夜ともなればメランの古城の城壁を亡霊が歩き回り、吐息をつきながら「わらわのクネムントはいまだお帰りあそばさぬか」と低い声で叫ぶのである。——彼

女が救済されるにはたった一つ条件がある。死すべき定めの人（「人間」）がだれか「あなたのクネメントはシェスリッツの近くでとつくの昔に討ち死にしちゃったよ」と応じればいいのだ。この条件はとても簡単に思えるが、それでもいまだに成就しない。なにしろ彷徨う姫を見た者はぎよつとして言うべき言葉を忘れするか、恋人の名とか町の名が出て来ない、となるので。どうやら彼女はしかるべき返辞をしてくれる人たちにまだ会っていないようだ。かくして憩いを授からぬ亡霊はかわいそうに一世紀また一世紀と彷徨っている。高みでは永久に生き続ける伝説が靈氣に包まれて山上と城址をさすらい、平地では、ドイツの南北を結び、両者交流の媒たる蒸気機関車が鉄路を驀進する。

七〇九 羊飼いの綱

コーブルク地域のアーホルン村に、⁽⁹⁾ というか、その傍に——それゆえ民衆はマーレンとも呼んでいる——昔こ
れまた有名な巡礼地があった。かつてここに老魔女がいて、アーホルンの住民に怨恨を抱き、彼らに嵐を齎したの
で、この女が轟轟と捲き起こした突風で鐘樓の尖端が曲がってしまった。そこで近隣の人たちがからかつていわく
「アーホルンの斜視。アーホルンの塔、傾いでる（「へべれけだ」）。こうした類の毒のあるおちゃらかしはもつと
あった。アーホルンの衆はこれが大層気に障り、あちこちに助けを求めたところ、ある信心深い羊飼いが見つかつ
た。この男、聖人がたや天国の蠟燭を目にしたことはなかったが、どこがまずいのか分かつていたので、修理を約
束した。そしてとても長く太い綱を手に入れると、一端を鐘樓の尖端に、もう一端を唐檜——これは今でも山際に
立っている——に結び付け、呪文を唱えながら引っ張って、曲がった尖端を真っ直ぐに戻した。悪さを働いて尖端

をへんてこにした例の嵐魔女は当然の報いとして火刑に処されたが、綱は大事に取っておかれ、いまだに見ることができし、この話は教会記録簿に記されている。

楓^{アイホルン}がこの村の名の由来だが、これが付いているのはこばかりではない。なにしろ界限^{かいわい}にはまだフライ^{アイ}ホルン、キルヒエン^{アイ}ホルン、ヴェーステン^{アイ}ホルンがあるのだ。異教徒だった先祖たちにとつてさだめし、柏^{アイヒ}、山毛櫨^{ブーヘ}、科^{リンデ}の木と同様、崇拜の対象とした樹だったのだろう。その成長の速さ、高く伸びる幹、涼しい蔭^{かげ}を恵んでくれる葉は、古今のギリシア人に劣らず、古代ドイツ人には貴重な存在であり、彼らがこの樹に榮譽^{エーレ}という名を与えたのは故無しではなく、また彼らはこの樹の葉に粘り強い堅実さの象徴を見た。

訳注

- (1) 一二五四年のこと *im Jahr 1254* モンゴル軍の第一次ポーランド侵入は一二四〇年から一二四一年に掛けてである。尤も第二次が一二五九年、第三次が一二八六／八七年にあった。
- (2) クラカウ *Krakau*. 現ポーランド第二の都市クラクフ *Krakow* (現人口約七十六万)。ヴィスワ *Wisla* (ドイツ語ヴァイクセル *Weichsel*) 川上流河畔に位置し、一五九六年まではポーランド王国の首都だった——現首都はヴァルシャ *Warszawa*＝ワルシャワ (現人口約百七十二万)。二四一年三月二十四日、市民が見棄てたクラクフはモンゴル軍に焼き払われた。モンゴル軍第二次、第三次侵入でもクラクフは掠奪を受けている。
- (3) リーゼンゲビルゲ *Riesengebirge*. *DSB* 六三九注参照。
- (4) チェスラウ聖者 *der heilige Czeslaw*. チェスワフ *Czeslaw* 福者 (一一八四頃—一二四二)。シレジアの使徒。一九六三年以降ボレスワフ (ドイツ語ブレスラウ) の守護聖人。
- (5) ヴァールシュタット *Wahstadt*. ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在では普通 *Wahstrat* である。一二四一年四月九日モンゴル軍がドイツ・ポーランド連合軍を打ち破った「リーグニッツ (レグニツァ) の会戦」*Schlacht bei Liegnitz* (*Bitwa pod Legnicą*) のこと。七年戦争における一七六〇年の「リーグニッツの会戦」(プロイセン王国軍対オーストリア大公国軍)との混同を避けるため「ヴァールシュタットの会戦」*Schlacht bei Wahstatt*とも呼ばれる。ヴァールシュタットはリーグニッツ (レ

- グニツァ)の南東約一〇キロほどにある村のドイツ語名称だった。現在のポーランド語名称はレグニツキエ・ポレLegnickie Pole (「レグニツァの野」の意)。
- (6) 自殺 Selbstmord. キリスト教圏では伝統的に自殺を罪と見做して忌避——英国では一九六一年まで刑法上の犯罪だった——しており、教会墓地への遺骸埋葬が聖職者によって拒否された時代もある。
- (7) 吸血鬼 Vampir. ベヒシュタインは上記のごとく綴っているが、現在では普通 Vampir. 不自然な死を遂げた者、犯罪者、この世に思いを残した者等々が歩く死人、ないし不死者となつて、命の象徴である血を眠っている人々から吸う、と考えられた存在。様様の超自然的能力(たとえば、霧、狼、蝙蝠などに変身できる)を持つ。吸血鬼に血を吸われて衰弱死した者も吸血鬼となる、ともされた。こうした俗信は多く南東ヨーロッパの諸民族に属するが、リトアニア、ポーランド、南ロシアなど他地域にも存在する。
- (8) オイレン山地 Eulengebirge. 現ポーランド南西部にある「山山・ソヴィエ」Góry Sowie. チェコ語「ソヴィー・山山」Sovi hory. 赤い獅子 der rothe Leu. 錬金術の用語で、「黄金」および「酸化水銀」(猛毒)を意味する。この物語では前者。
- (9) ボヘミア王ヴェンシエル König Wenzel von Böhmen. ルクセンブルク家のヴァーツラフ四世 Václav IV. (在位一三七八一—一四一九)。神聖ローマ皇帝(在位一三七六一—一四〇〇)。神聖ローマ皇帝カール四世・ボヘミア王カレル一世の子息。
- (10) 皇帝カール四世 Kaiser Karl IV. 神聖ローマ皇帝カール四世(在位一三五五—七八) Ⅱボヘミア王カレル一世(在位一三四六—七八)。一二一六年ブラハに生まれ、一三七八年同地に死す。ルクセンブルク家。中世後期の最も重要な皇帝にして同時代最も影響力のあったヨーロッパの君主の一人。父はボヘミア王ヤン・ルクセンブルク伯ヨハン、母はプシエミスル家最後の王ヴァーツラフ三世 Václav III. の妹エリシユカ(ドイツ語エリーザベト)。カール四世Ⅱカレル一世の統治下、ブラハは中欧の中心にして神聖ローマ帝国の帝都として隆盛を極めた。
- (11) ボヘミアの邦 Land Böhmen. 「ボヘミア王国」や「ボヘミアの王冠」の下に統治された領域——ボヘミア王国、モラヴィア辺境伯領、シレジア公国、および両ラウジッツ(北ドイツのエルベ河とオーダー河の間の地方。南半を上ラウジッツ、北半を下ラウジッツと称する。ただし、後ザクセン選帝侯領となるなど帰属は歴史的に複雑)の四つの領邦を合わせたもの——ではなく、現チェコ共和国を形成しているボヘミア、モラヴィア、一部シレジアの中のボヘミア地方(現チェコ西部・中部)と考えれば好いか。
- (12) ボヘミア Bohemia はラテン語名称。ドイツ語ベヘン Böhmen、チェコ語チェヒ Czechy。
- (13) クッテン山 Kutenberg. 「クッテンベルク」は町の名でもある。現チェコ・中央ボヘミア州クトナー・ホラ郡の都市クトナー・ホラ Kutná Hora (現人口二万余)。既に十世紀頃からこの辺りで銀が産出されていたようだが、町は十二世紀に鉱夫たちの集落と

- して始まった。十三世紀末にはボヘミアで最も活気に溢れ、最も豊かな町の一つとなった。一二〇〇年頃プシエミスル家最後から二代目のボヘミア王（在位一二七八—一三〇五）ヴァーツラフ二世 Václav II. = ポーランド王（在位一三〇〇—一三〇五）ヴァツワフ一世 Wacław I. — ドイツ語ヴェンツェル二世 Wenzel II. — がクッテンベルクから産出された銀で鑄造させた良質のプラハ・グロッツシェン銀貨（ドイツではボヘミア・グロッツシェン銀貨）は有名である。この時分にはプラハに次いでボヘミア第二の都市だった。しかしフス戦争中一四二〇年代にフス派の軍勢に住民の大半が殺され、その後町は重要性をほぼ失った（「フス戦争」「フス派」についてはDSB六二七注参照）。今日旧市街はユネスコ世界文化遺産の一つ。
- (14) 二番目の男の妻 die des ersten. 原文は上記の通り。しかしこれでは「一番目の男の妻」になってしまふ。ベヒシュタインとしては「二人の中の一番目の男の妻」のつもりなのだが、いかにも煩わしい。そこで訳文で訂正した。
- (15) ドイツ・ボヘミア山地 deutschböhmisches Gebirge. 「ラウジッツ山地」 Lausitzer Gebirge（チェコ語「ルジケー・山」 Lužické hory）を指していると思われる。ザクセン南東部と北ボヘミアの間に位置する。
- (16) あつ修道士 den Mönch. 突然この語が出て来たので当惑するが、水の精を指していることは前後から明白なので、「水の精」と補った。特定の精霊が修道士と言われ、山の精や家の精などに例がある。灰色や黒の僧衣、頭巾、帯、腰に提げた鍵束といった外見的特徴が似ているからである。しかし寡聞にして男の水の精がそう呼ばれている伝説は知らない。識者の「高教を俟つ」。
- (17) 古貨幣のボヘミア・グロッツシェン銀貨で mit alten böhmischen Groschen. 「ボヘミア・グロッツシェン銀貨」についてはDSB六六三注「クッテン山」を参照。
- (18) トラウテナウ Trautenau. 現チェコ・フラデツ・クラロヴエー州トルトノフ郡の都市トルトノフ Trutnov（現人口約三万一千）。桶 Eimer. 一桶は約六〇リットル。
- (19) 酒石 Weinstein. ワインには酒石酸が多く含まれていて、樽入りの場合底に沈澱する滓にも樽の周壁にも白い小さな結晶体が生じる。これを粗酒石という。主成分は酒石酸水素カリウム。
- (21) 別の山の上に auf einer andern Burg. 原文は上記の通り。しかしこれでは「別の城（の上）」になってしまふ。auf einem andern Berg でなければおかしい。そこで訳文で訂正した。
- (22) 「娘欲しけりや、その母親に取り入らなくてはなりませぬ」 wer die Tochter haben will, muß es gut mit der Mutter meinen. 遠回しに申せば、「將を射んと欲すれば、まず馬を射よ」。
- (23) ケーニングレーツ Königgrätz. 「王妃の城」の意。ケーニグレーツ Königgrätz（「王の城」の意）のこと。この都市は、ボヘミア王ヴァーツラフ二世 Wacław II. = ポーランド王ヴァツワフ一世 Wacław I. — ドイツ語ヴェンツェル二世 Wenzel II. — の寡

- 婦産だったので、「ケーニギンクレーツ」の方が由来としては正しい。チェコ語フラデツ・クラローヴェー Hradec Králové (「王妃の城」。現人口約九万三千)。北東ボヘミア、リーゼンゲビルゲ前縁地、エルベ川上流に位置する。現チェコ・フラデツ・クラローヴェー州フラデツ・クラローヴェー郡の行政中心地。
- (25)(24) ツイスカ Ziska. ヤン・ジシユカ Jan Žižka (一三七四—一四二四)。フス戦争の英雄。隻眼だったので、「片目のジシユカ」と呼ばれた。
- (26) ボヘミアの尾根と呼ばれるかの山地^{ゲビル} das Gebirge, welches man die böhmischen Kämme nennt. オルリケー・ホイオリッケ Hoy (ドイツ語^{アドルゲビルゲ}の山地 Adlergebirge) であろう。
- (27) ライヒェナウ Reichenau. 現チェコ・フラデツ・クラローヴェー州リフノフ・ナド・クニエジュノウ郡の行政中心地リフノフ・ナト・クニエジュノウ Rychnov nad Křežnou (現人口約一万二千)。クニエジュナ(ドイツ語クニージュナ) 河畔にある。フラデツ・クラローヴェーの東方約三〇キロ。
- (28) カルパティア山脈 Karpathen. 中欧、東欧、南欧にまたがる高い山脈。オーストリア、チェコ、スロヴァキア、ハンガリア、ポーランド、ウクライナ、ルーマニア、セルビアに属する。最高峰はスロヴァキアの最高峰でもあるゲルラホフスカ山 Gerlachovský štít (二六六三メートル)。長さ一三〇〇—一三五〇キロ。西方へ開いた弧状を成す。
- (29) チェヒとレヒ Czech und Lech. チェコ語の発音はチェフとレフが近似値。一二九五年のグネーゼン^{ツェン}＝ポーゼン(ポーランド語グニエズノ^{ツェン}＝ボズナニ) 大同教区の「大ポーランド年代記」によれば、レフ Lech とチェフ Čech とルス Rus (あるポーランドの叙述ではレフ Lechu、チェフ Czech、ルス Rusie) は三兄弟で、それぞれポーランド人、チェコ人、ウクライナ人・ロシア人の始祖とされる。
- (30) ボイの地ないしボイエム^{ボヘミア}の地 Bojer oder Boiener Landschaft. 原文は上記の通り。「ボヘミア」Bohemia というラテン語名称は、ローマの歴史家タキトゥスによれば、紀元前一世紀に至るまでこの地方に居住していたケルト人の一派ボイイ族 Boii に由来する、とのこと。
- (32)(31) チェホーヴァ Czechowa. 原文は上記の通り。
- ジープ山 Reip. 現チェコ・ウースチー州リトムニエツェ郡の都市ロウドニツェ・ナト・ラベム Roudnice nad Labem 近傍のジープ^{Reip}山(標高四五六メートル)。ボヘミア平原に鍋を伏せたような形に聳える。建国伝説の纏わるこの山はかつてカトリック教徒の巡礼地であり、今日チェコ国民の記念地である。ドイツ語の片仮名表記は「ルツィーブ」となるうが、チェコ語のアルファ

ベット²を表記するため²としたと思われるので、片仮名はこれの近似値とした。

- (33) カウジム Kaurzim. 現チェコ・中央ボヘミア州コリン郡の小さな町コウジム Kouzim (現人口約千八百)。ボヘミア最古の都市の一つとされる。中世全期を通じて重要な町だったが、近世発展の機会を失う。ドイツ語の片仮名表記は「カウルツィム」となるが、チェコ語のアルファベット²を表記するため²としたと思われるので、片仮名はこれの近似値とした。

- (34) ザモ Sano. チェコ語の発音なら「サモ」が近似値。六〇〇年頃—六五八／五九年頃。七世紀のフランク王国史の主資料である『フレデガール年代記』Fredegar-Chronikによれば、フランク王国出身の商人で、あるスラヴの邦の支配者になった由。六二三／二四年頃中欧東部に王国を創設、その死に至るまで三十五年間王として統治したそう。王国の中心はおそらく今日のモラヴィア、下エスターライヒ、南東スロヴァキアだったらしい。

- ダゴバート王 König Dagobert. DSB五本文および注参照。

- ヴラデイカ Wladyka. 原文は上記の通り。

- (35) ブーデチュ Budecz. 現チェコ南ボヘミア州インドジフフ・フラデツ郡の村ブーデチュ Budeč。

- (36) ヴィシエラト Wischerad. ベヒシュタインが上記のごとく綴っている——これは独り彼のみに留まらない——ので、已むを得ず「ヴィシエラト」と片仮名表記したが、「ヴィシエフ、ラト」Vysehrad (「高い城」の意)のこと。滔滔と流れるヴルタヴァ Vltava (ドイツ語モルダウ Moldau) 川右岸 (＝東側) に位置し、川を見下ろす懸崖上にある。一八八三年以降ブラハの市域に入ったが、かつては城下町と共にブラハとは独立した存在だった。初代ボヘミア王ヴラチスラフ二世 Vratislav II (在位一〇八五—九二) はブラハ司教と対立したこともあって、宮廷をブラハ城 Prazský hrad からここに移した。城はフス戦争でフス派の軍勢によって徹底的に破壊された。後オーストリア・ハプスブルク家統治下で要塞が整備されたが、現在は城址公園となっている。公園内にある聖ベテロ聖パウロ大聖堂 Bazilika svatého Petra a Pavla および聖マルティン²形²聖堂 Rotunda svatého Martina は有名。聖堂に接してブラハの最も重要な墓地——ドヴォジャークヤスメタナの墓もここ——がある。伝説上のボヘミアの女君主リブシェとその配偶プシエミスルの像もここに建てられている。リブシェは左手を挙げて立ち、プシエミスルは斧を携えてその傍らに坐っている。これはチェコの代表的彫刻家ヨゼフ・ヴァーツラフ・ミスルベク Josef Václav Myslbek (一八四八—一九二二) の作品の一つ。この「リブシェの沐浴場」(DSB六七五参照) からヴルタヴァ川を越えてブラハ城とその下に広がる市街を遠望すると絶景。

- (39) ビルヴァイゼ Pliwiese. 妖精、魔女 (シレジアなど)、魔物。ビルヴィス Blüwis、ビルヴィッツ Blüwiz、ビルヴィッツ Plüwiz その他似通った発音・綴りが多数ある。

- (40) リブッサ (リブシヤ) Libussa (sprich Libuscha). チェコ語では「リブシェ」Libuše。ボヘミアのプシエニスル Přemysl 王朝の伝

- 説的祖妣。十二世紀初頭、プラークのコスマスがラテン語で著した『はへみあ年代記』*Cosmas von Prag Chronica Boemorum*によれば、リブシェなる女予言者は士師クロク(始祖チエフ・Cechの後継者)の娘で、女医師カジクザ、女祭司テタTetaの末妹となっている。彼女は父から士師の職を引き継ぐよう定められた。その後ある仲裁裁定がうまく運ばず、裁定を受けた男が、女の言うことに従わねばならないとは、と不平を並べた。この言葉に傷ついた女性支配者は、民衆にある予言を行い、その通りの男を配偶とする、と誓ったのである。この男が犁を用いて畑を耕していた農夫プシエミスル(後出)だった。
- (41) リビーン Libin. チェコ語Libin. ヴァーツラフ・ハーイエク・ズ・リボチャン著『チェコ年代記』Václav Hájek z Libočan: *Kronyka Ceska*. Prag 1541. 言及されている。独訳 *Böhmische Chronik, Vom Ursprung der Böhmen*. Leipzig 1718. がある。
- (42) ビーリナ Bila. 原文は上記の通り。しかし次の注参照。
- (43) スタディチュ村 Dorf Stadicz. 現チエコ・ウースチー州ウースチー・ナト・ラバム郡のビーリナ河谷にある小村スタディツェ Stadic. 現在はジェフロヴィツェ村 Rehovice の一部。プシエミスルの生誕地とされる。
- (44) プシエミスル Přemisl. ドイツ語の片仮名表記は「プルツエミスル」となるうが、チエコ語のアルファベットを表記するためとしたと思われるので、片仮名はこれの近似値とした。
- メツツェ Metze. 昔の量目単位で、約三・四リットル。
- (45) ヴラタヴァ(モルダウ) Wlatawa (Moldau). チエコ最長の川ヴルタヴァ Vltava。ドイツ語モルダウ。長さ四三〇キロ、流域面積二八〇〇平方キロ。プラハを貫流し、北ドイツ平原でラベLabe(エルベElbe)に合流する。
- (47) 敷居 Schwelle. しかし「敷居」では次の文と意味が繋がらない。建具としては全く逆の位置にある「鴨居」(ドイツ語 Sturz)でなければおかしい。後出「プラフ」、すなわち Praha はある時代「鴨居」を指した由。これは石川達夫著『黄金のプラハ 幻想と現実の錬金術』(平凡社選書、平凡社、二〇〇〇年)で指摘されている。「丈の高い者たちも……の前では身を屈めなくてはなりません」とは「プラハの栄光に対して」どんな高位にある者でも敬意を抱き、頭を下げなくてはならない」の意である。J・K・A・ムゼーウスは「リブツサ」でやはり Praha を Schwelle と訳している。なお、J・K・A・ムゼーウス著鈴木満訳『沈黙の恋 ドイツ人の民話』(国書刊行会、平成十九年)三一四―一五ページ注をも参照されたい。
- (48) 都市は敷居に基づきプラハとかプラガとか名付けられた welche den Namen Praha, Praga, von der Schwelle empfing. 原文は上記の通り。
- (49) ゲツェルカの泉 Wasserquelle Gezerka. チェコ語「ジェゼルカの泉」Studánka Jezerka.
- (50) 聖ペテロ聖パウロ教会 die Kirche St. Peter und Paul. DSB六七六注参照。

- (51) ずんぐりした石柱の破片 ein starkes Säulenfragment. 二本の円筒形の石柱がお互いにもたれかかるように立っている。ベヒシエ
 タインが紹介している伝説はほぼ C. A. レーデル『プラーク名所案内』Carl Adolf Redel: *Das Sehenswündige Prag*. Rüdiger
 [110. にあるものと同じ。これだけではどうも筋が通らない。実は、悪魔が敬虔な司祭を墮落させてカード賭博に引き込み、三年間
 勝たせてやる代わりに魂をよこせ、との内容で司祭と盟約を結ぶが、契約終了時、聖ペテロが司祭の救済に乗り出す、というもの。
 ローマなるヴァティカン¹の教会から aus der Kirche des Vatikans zu Rom. 後出の聖ピエトロ大聖堂 Basilica di San Pietro in
 Vaticano のこと。世界最大の教会建築の一つで、現在はその北にあるローマ教皇の住むヴァティカン宮殿やヴァティカン美術館と
 ともにヴァティカン市国を構成している。
- (52) ヴェネチア湾を den Venetianischen Meerbusen. 「ヴェネチア湾」はイタリア語 Golfo di Venezia。アドリア海最北部の湾。ロー
 マとブラハを結ぶ直線は、¹「ここ」を通る。
 行ケ。送ラレタリ¹ Itel Missa est. 後期ラテン語 Itel missa est。ミサの司式者がミサの最後に会衆に告げる言葉「そなたたち、
 行きなさい。送られました」。聖トマス・アキナスによれば、「送られた」の主語（女性単数）は「生贄」¹hostia である。
 他に二つの破片 die beiden andern Stücke. これでは意味不明。前掲『プラーク名所案内』でははっきり「この三つの破片」
 welche drey Stückと書かれてる。
- (53) テヴェレ川向¹側の聖ペリ¹ア教会 die Kirche St. Maria jenseit der Tiber. 聖ペリ¹ア・イン・トラステヴェレ聖堂 Basilica di
 Santa Maria in Trastevere。ローマの下町と言われるテヴェレ川向¹側地区にある古い由緒を誇る教会。
- (54) イグナチウス聖者 der heilige Ignatius. 聖イグナチオ・ロペス・デ・ロヨラ Ignacio López de Loyola (一四九一—一五五六)。カ
 スティリア王国領バスク地方出身。軍人だったが戦傷を負い、療養の過程で次第に深い宗教心に目覚め、ベネディクト会派修道士
 となる。やがて「神のより大いなる栄光のために」(Ad Maiorem Dei Gloriam)をモットーとするイエズス会を創設、初代総長と
 なる。
- (55) フラジ¹ン Hradschin. このドイツ語は「ブラハ城」ないし「その城山」を指している。チェコ語「フラチャニ」Hradčany (本来
 は「城の町」「城の傍の町」の意)。フラチャニ(の丘)の上にブラハ城があり、丘の前にフラチャニ広場がある。
- (56) 黄金球亭¹ Zur goldenen Kugel. 現在もあるレストラン「ウ・ズラター・コウレ」U zlaté koule であろう。
- (57) 第十二代ボヘミア公 der zwölfte Herzog Böhmens. 歴史的に把握し得る、かつプシエミスル家として名の分かっている最初のボ
 ヘミア公ボジヴォイ一世 Bořivoj I. (治世八七五—八九)から数えると、ヴラスティラフ一世は三代目である。伝説的支配者および
 公とはいえない支配者をも数に入れ、クロクを初代とすればヴラスティラフ一世は十三代目となる。リプシエの配偶プシエミスル

を初代とすれば十二代目。

- (61) ドラホミール Drahomira. ヴラスティラフ一世の配偶ボヘミア公妃ドラホミール Drahomira。生誕八九〇年頃(別資料によれば八七七年頃とあるが、それでは夫より大分年上となる)——死去九三四年(別資料によれば九三六年)以降。九二一年、夫が三十三歳で死ぬと、長男ヴァーツラフの摂政(四、五年間)となる。姑(ヴラスティラフ一世の母)ルドミラ(後聖^{スワティ}ルドミラ Svata Ludmila)暗殺(九二一年)の元兇とされる。

- (62) ヴラティスラウ Wratislav. ボヘミア公ヴラスティラフ一世 Vratslav I (在位九一五—九二二)。ボジヴォイ一世とその配偶ルドミラの子息。兄スピティニエフ一世 Spytihnev I (在位八九四—九一五)の死後ボヘミア公に即位。西スラヴ系部族出身の妻ドラホミールとの間に長男ヴァーツラフ、次男ボレスラフ、それからおそらく三男スピティニエフおよび娘四人を儲ける。

- (63) ヴェンツェスラウ Wenzeslaw. ボヘミア公ヴァーツラフ一世 Václav I (在位九二二—九三五)。添え名^{スワティ}して聖ヴァーツラフ Svaty Václav。チェコの守護聖人。九二五年ないし九二六年成人したヴァーツラフは母を追放し、国内のキリスト教化を推進し始め、外交的には西方の強大な勢力である東フランク王国の宗主権を認めて、その外圧を緩和、ボヘミアを西側の一員とした。しかし、これに反撥する弟と弟を支持する貴族たちのクーデターに遭い、弑逆される。

- (64) ボレスラウ Boleslaw. その弟ボレスラフ一世 Boleslav I (在位九三五—九七二)。ボレスラフは兄を自領に招いて殺害した。添え名^{ウクレニイ}して殘虐公 Ukrutny。

- (65) ザーツ Saaz. 現チェコ北部ウースチー州ロウニ郡の都市ジャテツ Zatec (現人口約二万)。プシエミスル家ボヘミア王オタカル二世 Otakar II. (在位一二五三—一二七八) 治下の一二六五年には王都と宣言され、諸種の特権を賦与されたことがある。

- (66) Abgeordneten des Kaisers zum Fenster herausgeworfen. 一六一八年五月二十三日、前年ボヘミア王(在位一六一七—一九一六二〇—一三七)に即位したハプスブルク家のフェルディナント二世^{神聖ローマ皇帝}フェルディナント二世(在位一六一七—一三七)の使者である顧問官三名と書記二名がプラハ城の三階から新教徒派に突き落とされた事件。下に干し草が積んであったお蔭で内三名は命を取り留め、ウィーン^{ウィーン}の皇帝の許に委細を注進した。フェルディナントは強硬な新教徒迫害政策を実施しようとした矢先だった。悲惨な三十年戦争(一六一八—一四八)の発端である。ボヘミア貴族らは新教徒のプファルツ選帝侯フリードリヒ五世をボヘミア王に推戴、神聖ローマ帝国から離脱しようとの動きを開始した。これに対し皇帝側は強力な傭兵軍を派遣、一六二〇年^{白山}の戦い^{白山} Bitva na Biele hoře でボヘミア軍を撃破し、プラハを制圧、叛乱首謀者を多く処刑、ボヘミアの新教徒を弾圧した。これは邦内外の新教徒の反撥を招き、やがてはドイツ全土を荒廃させた苛烈な宗教戦争となる。

- (67) プラーク橋 die Prager Brücke. プラハの象徴の一つともいえるべき石造のアーチ橋であるカレル橋(Karlův most (ドイツ語カール橋 Karlsbrücke))。ヴルタヴァ川に架かる現存最古の橋にしてヨーロッパ最古の石造橋の一つ。神聖ローマ皇帝カール四世Ⅱボヘミア王カレル一世により一三五七年礎石が置かれた。竣工は一四〇二年。
- (68) スロヴァン教会 die Kirche Slovan. 未詳。
- (69) 聖エマウス修道院 St. Emaus. プラハのベネディクト会派修道院「エマウツキイ・クラシシュター」Emauzský klášter。一三七二年皇帝カール四世および無数の高位貴族、高位聖職者が列席して、聖母マリアとこのスラヴの守護聖人に奉獻された。現存。
- (70) 小地区 Kleiseite. 「ブラー・ストラナ」Malá Strana のこと。フラチャニ地区の下に位置するプラハの歴史的地区。カレル橋で旧市街と結ばれている。
- (71) ブラディチュ Braditz. チェコ語の綴りでは Bratic となる。未詳。
- (72) プラーク橋を渡るとき、坊さん、娼婦、白馬に出逢わぬことはありませぬ man kann nicht über die Prager Brücke gehen, ohne daß einem begegne ein Mönch, eine feie Dirne und ein weißes Pferd. パリのボン・ヌフにも同じ諺があるそう(Th. Göer ティエ著田邊貞之助訳『キャピテン・フラカス』、岩波文庫、岩波書店、昭和二十七年)。案ずるにヨーロッパの繁華な都市にある長大で殷賑な橋にはこうした諺が付き物だったのであろう。
- (73) ベラウン Beroun. 現チェコ中央ボヘミア州ベロウン郡の都市ベロウンBeroun (現人口約一万九千)。十三世紀末には大半ドイツ系商人が住民だったが、一四二二年フス派の部隊に占領され、以来ボヘミア系が多数を占めるようになった。
- (74) 赤ん坊がひどく弱っているのです das Kindlein sei sehr schwach. それゆえ一刻も早く洗礼式を執り行う必要がある、というわけ。城郭にして要塞たるカールシュタイン Burg und Festung Karlstein. プラハ南西は三〇キロにあるカルシュティン城(Hrad Karlstein)。一三四八年皇帝カール四世Ⅱボヘミア王カレル一世によって築かれ、ほぼ一三五〇年から一四二一年まで戴冠式に用いられる什器その他帝国の財宝の保管場所として用いられた。現在本質的部分は残っている。
- (75) 巨大な塔 einem riesigen Thurne. 大塔 Velká věž. 六階建て。窓のない北側の壁の厚さは六メートルにも及ぶ。王の居館よりも物物し。三階にはカールシュタインの心臓部ともいえるべき聖十字架礼拝堂がある。
- (76) 聖女ルドミラの寝台 die Bettstätte der heiligen Ludmille. 原文は上記の通り。「聖女ボヘミアのルートミッラ」Heilige Ludmilla von Bohmen. 聖ルドミラ Svata Ludmila (八五五と八六〇の間一九二二)はボヘミアの女君侯。この邦でキリスト教に改宗した最初の女性支配者で、この邦最初の聖女。DSB 六七八注「ドラホミラ」参照。
- (77) 一四二二年カールシュタインは攻囲され Im Jahre 1422 wurde Karlstein belagert. プラハのフス派がこの城に保管されている帝

室・王室の什宝を奪おうと来襲したもの。攻囲は失敗に終わった。

- (79) ジークムント王 König Sigmund. ボヘミア王ジークムント Zikmund (在位一四一九—一三七) ムルクセンブルク朝神聖ローマ皇帝ジギスムント Sigmund (在位一四〇一—一三七)。父は皇帝カール四世^{II}ボヘミア王カレル一世。ジギスムントはキリスト教改革派ヤン・フスを火刑に処した(一四一五)。一四一九年異母兄ヴェンツェル(チェコ語ヴァーツラフ四世)が死んだのでボヘミア王をも兼ねると、かねてジギスムントに不満を抱いていたフス派が大規模な叛乱に踏み切った。

- (81) ヴィトルト Vitold. リトアニア大公ヴィータウタス Vytautas (在位一四〇一—一三〇)。ポーランド王ヴワディスワフ二世の従弟。ヴラディスラウ Wladislaw. 元リトアニア大公ヨガイラ Jogaila で、ポーランド女王ヤドヴィガと結婚し、ヴワディスワフ二世やギエウオ Wladyslaw II Jagiello として戴冠、女王と共同統治(一三八六—一三九九)。女王の死後単独ポーランド国王(一三九九—一四三四)。その統治期間中ポーランド・リトアニア同君連合はキリスト教世界最大の国であり、ポーランドの黄金時代であった。リトアニア公子コリブート Prinz Korbout von Litauen. Sigmund Korbout (発音未詳)。

トゥルクザ・フォン・ブライネ Tluksa von Buraine. 原文は上記の通り。未詳。

- (85) ヴェルハルティッツ城 Schloß Welharitz. 現チェコ・ブルゼニ州クラトヴィ郡の山城ヴェルハルティツェ城 Hrad Velharitz。ブラークの雪の聖母マリア教会 Kirche Maria Schnee zu Prag. チェコ語 Kostel Panny Marie Sněžné。もとよりカトリック教会だったこの教会は、フス派の叛乱が始まると、その過激派の策源地とされた。十六世紀には荒れ果てていたが、十七世紀初頭フランチェスコ会派により修復・増築された。現在の建物は十八世紀初頭のバロック建築。

- (86) 加えて蛇 daneben auch Schlangen. これは腐敗しているとは形容されていない。また、蛇を投げ込む例は他にもあるが、それは生きていて蛇、できれば毒蛇を用いた。従ってこの部分は文脈上整理されていない。

- (88) 聖マルティン祭 Martini. 聖ペルティヌス(聖マルタン)の祝日(十一月十一日)。冬の始まりの日でもある。

- (90) トルク皇帝の新式軍団 des Sultans Janischaren. トルク語「イェニチェリ」Yeniceri (新しい・兵士)は多民族イスラム国家オスマン帝国の常備歩兵軍団。十四世紀後半頃から十九世紀初頭まで存在した。十六世紀前半くらいまでは厳しい軍紀を持つ精鋭部隊であり、オスマン帝国の軍事的拡大に大いに貢献した。

- (91) 万聖節と万霊節 Allerheiligen- und Allerseelentag. 十一月一日と二日。

- のろ鹿 Reh. ユーラシア大陸中・高緯度に棲息する小型の鹿で、中・西欧では代表的猟獣の一つ。そうした猟獣の新鮮な肉が兵糧に苦しんでいる籠城部隊にあらうはずはないが、もしあるとすれば、城側が生活物資補給に何ら不自由していない証拠となる。カルタウネ砲 Karthaune. 十五・十六世紀の先籠め砲。

- (92) チャスラウ Časlau. 現チェコ・中央ボヘミア州クトナー・ホラ郡の都市チャースラフČáslav。
- (93) ゼトリッツ修道院 Kloster Sedlitz. 現チェコの都市クトナー・ホラの一街区セドレッツ Sedlec にあるシトー会派修道院。ボヘミアでシトー会が初めて根を下ろしたところ。
- (94) プラークの大聖堂 der Dom in Prag. 聖^{ヘンリッヒ}ヴィート大聖堂 Katedrála svatého Víta のこと。プラハで最も由緒ある寺院。プラハ城の内側にある。着工時の代表的後援者の一人は皇帝カール四世^{ルドルフ}ボヘミア王カレル一世だが、一三四四年の着工以来一九二九年の最終的竣工まで実に六百年近く掛かった。しかし、着工のお蔭で従来マインツ大司教管下にあったプラハ司教区はプラハ大司教区になった。
- (95) ツイスカ Ziska. シシユカ。DSB六六八注参照。
- (96) そして一六五七年八月二十日 und im Jahr 1657 den 20. August. なぜ一六六三年の記事の次ぎにこれより以前の記事があるのか不明。
- (97) 頭巾付き外衣 Cuculle. ラテン語「ククッルス」 cucullus (袋) から。とりわけ中世盛期に僧侶が使用したフード付きマント。さまたまな長さのものがある。
- (98) オルミュッツ Olmütz. Olmitz。現チェコ・オロモウツ州オロモウツ郡の都市（人口約十万）オロモーツ Olomouc（モラヴィア語）、オロモウツ Olomouc（チェコ語）。チェコで二番目に古い大学があり、十七世紀まではモラヴィアの歴史的な中心だった。今日でも商業・文化・行政の重要な中心地である。
- (99) 「我ラノ許ヨリ去レ」(修道院から出て行け) „cedite nostris.“ (das Kloster zu verlassen). 原文は上記の通り。
- (100) ブーデチュ Budecz. DSB六七一注参照。
- (101) 乙女戦争 Mädekrieg. DSB六五六注参照。
- (102) プラークの大学 Hochschule zu Prag. プラハ・カレル大学 Univerzita Karlova v Praze = ラテン語 Universitas Carolina Pragensis。一三四八年皇帝カール四世^{ルドルフ}ボヘミア王カレル一世によって創設された。アルプス以北バリ以东で最古、かつてのドイツ語圏最古、チェコ最古最大の大学。
- (103) ヴェルヴァルン Welwarn. 現チェコ中央ボヘミア州クラドノ郡の町ヴェルヴァリ Velvary。プラハからマイセン辺境伯領に通じる重要な交易路沿いに位置していた。
- (104) ザーツ Saaz. DSB六七八注参照。
- (105) 何本も塹壕を掘り Springgräben graben. 訳は類推。Springgraben は『グリム・ドイツ語辞典』でも「跳躍練習のための溝」と

- 体操用語としての解説があるだけである。しかし、城塞や市壁を廻らした都市を攻める場合は、さまざまな攻城兵器を駆使する他、十七世紀以降だだと、何本も平行壕・斜壕を掘り進め、城壁、市壁に接近するのが一般的方法になったので、こう訳した。
- (106) プラヒン Prachin. 現チェコ・プルゼニ州クラトヴィ郡の古城(廃墟) プラーヘニ城 Hrad Prachen. ボヘミア最古の城塞の一つ。
 シュッテンホーフエン Schüttenhofen. 現チェコ・プルゼニ州クラトヴィ郡の都市スシチェ Susice (現人口一万一千余)。
 (107) ボヘミア山地前地に位置する。
 (108) ズアターボル山 der Sutarbor. 未詳。
 (109) ムーゲルども Mugeln. 原文は上記の通り。モンゴルを意味するベルシア語のムゲール(ムガル帝国の語源) が更に転訛したか。尤もこれはドイツ語では普通「モーグル」Mogul である。
 (110) クラッタウ Klattau. 現チェコ・プルゼニ州クラトヴィ郡の都市クラトヴィ Kratovy (現人口二万二千余)。プルゼニ(ドイツ語ビルゼン) 南方四三キロ。
 シュタンカウ Stankau. 現チェコ・プルゼニ州ドマジユリツェ郡の大都市スタニコフ Stankev (現人口三千余)。
 (111) エルボーゲン Ellbogen. 現チェコ・カルロヴィ・ヴァリ州ソコロフ郡の大都市ロケット Loket (現人口約三千)。
 (112) 城 Schloß. エルボーゲン市を防御ないし支配する軍事責任者の城郭で市域内にあった。この騎士は城伯、すなわち城代としてこれを預かっていたわけ。
 (113) ヨーハン・フォン・ヴェルト Johann von Werth. 一五九一—一六五二年。三十年戦争時代の最も有名な騎兵部隊將軍の一人。
 (114) エーガー市 Stadt Eger. 現チェコ・カルロヴィ・ヴァリ州ヘブ郡の都市ヘブ Cheb (現人口三万二千余)。チェコの最も西にあり、北と南西がドイツに接しているヘブスコ(ドイツ語エーガーラント) 地方の中心。オージェオーレ(ドイツ語エーガー Eger) 河畔に位置する。
 (116) カールスバート Karlsbad. 現チェコ・カルロヴィ・ヴァリ州カルロヴィ・ヴァリ郡の保養地カルロヴィ・ヴァリ Karlovy Vary (現人口約五万)。ヨーロッパで極めて名高く、かつ極めて古い伝統を有する温泉地の一つである。この温泉の療養効果は十四世紀既に知られていた。
 (117) 巖に変えられた人人 die Steinverwandelen. この後の話では、これらは人間ではなくて、小人が呪われてそうなった、とされている。
 (118) アイヒヤ城 Schloß Aicha. 現チェコ語は不明。かつてはカールスバートから一時間のアイヒヤ村にあった城。
 (119) 聖ヨハネの祝日 Johannstag. 洗礼者聖ヨハネの祝日(六月二十四日)。DSBには再再出て来る。

- (120) ヴンジーデル Wunsiedel. 現バイエルン州上フランケン行政区ヴンジーデル・イム・フィヒテルゲビルゲ郡郡庁所在地（現人口約九千三百）。フィヒテル山地^{フィヒテル山地}の中心で、ジャン・パウルの生誕地。「ルイーゼンブルクの巖の迷宮」Luisenburg-Felsenabyrinthがある。
- (121) ヴァアイセンシュタット Weissenstadt. 現バイエルン州上フランケン行政区ヴンジーデル・イム・フィヒテルゲビルゲ郡の都市（現人口三千余）。
- (122) フィヒテル山地^{フィヒテル山地} Fichtelgebirge. 現バイエルン州北東部にあり、僅か一部が現チエコ北西部に掛かる中級山岳地帯。最高峰シュネーベルク（標高一〇五一メートル）。西へはバイロイト市、東へはチエコのヘプ（ドイツ語エーガー）市へ通じる。
- (123) レドヴィヒ Redwig. 未詳。しかし、現バイエルン州上フランケン行政区リヒテンフェルス郡の自治体レドヴィッツ・アン・デア・ロータハ Redwitz an der Rodach の誤りかも知れない。
- (124) 地獄妖怪^{ヘルレック} Hollenbutz. 夫にしょっちゅうがみがみ突く掛かる悍婦を「さながら怒り狂ったヘレンブッツのよう」ein zorniger verstellter Hollenbutz と形容している例があるので、そうした属性の魔物らしい。怖やの、怖やの。
- (125) 犬の橋^{フンズブリッケ} Hundsbrücke. DSB七〇五本文に出る。
- (126) フレンキッシュ・シュヴァイツ^{フレンキッシュ・シュヴァイツ}「＝フランケン^{フレン}のスイス」fränkische Schweiz. 現バイエルン州上フランケン行政区、フレンキッシュ・アルプ北側の地域。文化的地理学的諸特徴によつてスイスを髣髴とさせるので、十九世紀初頭にその名を得た。北はマイン川上流の溪谷、南はエアランゲン、東はバイロイト、西はフォルヒハイム Forchheim——市民は自分たちの町を「フレンキッシュ・シュヴァイツの表門」と誇る——に接する緩やかな丘陵地帯で、美しい市町村、古い城が点在する。
- (127) 異教の町^{ヘイデンシュタット} Heidenstadt. 実際の町の名ではない。DSB七〇五本文参照。これについて一六八四年最初の報告を行ったムッゲンドルフのマイアー牧師によれば、平野に二百以上の墳墓があり、いずれも六人から八人の男が入れる位の大きさで、異教時代の遺物が少なからず見つかった、とか。
- (128) ゼルヴィッツ Selbitz. 現バイエルン州上フランケン行政区ホーフ郡の都市。
- (129) マルスロイト Marlsreuth. マルレスロイト Marlesreuth。
- (130) ナイラ村 Dorf Naia. 現バイエルン州上フランケン行政区ホーフ郡の都市ナイラ（現人口七千六百余）。マルレスロイトはその一地区。
- (131) あんたら、呪ったり、誓ったりがどんどんひどくなるし、いつの日曜の朝でも稔り具合を見ようって、畑に出て来る始末だじゃあ Ihr flucht und schwört je mehr und mehr, ihr lauft in aller Sonntagsfrühe heraus auf eure Felder, Früchte zu beschauen. これら

- はキリスト教徒らしからぬ非行だ、と小人の女はなじっているのである。なぜなら、呪詛したり誓言を立てたりする場合、神や悪魔を引き合いに出すことが多かったし、日曜は本来キリスト教徒にとって安息日^{にち}、すなわち労働をせず、神を敬うための聖なる日なので。——尤も、小人族はキリスト教が苦手で、教会の鐘の音を嫌って逃げ出した、などという伝説が少なくないのだが……。
- (132) 鍛造工場^{たなぞうじょう} Hammerwerk 風力・水力や蒸気力を利用して鉄その他の金属を加工する工場。小人族としてはこうした機械文明は耐え難い。
- (133) ゼルプ^{ゼル} Seib. 現バイエルン州上フランケン行政区ヴァンジーデル・イム・フィヒテルゲビルゲ郡郡庁所在地(現人口約一万五千)で、チェコ国境のすぐ近くにある。現ザクセン州、現テューリンゲン州にも比較的近い。
- (134) ティーアシュタイン^{ティ} Thierstein. 現バイエルン州上フランケン行政区ヴァンジーデル・イム・フィヒテルゲビルゲ郡の町。フィヒテルゲビルゲに位置し、チェコ国境に近い。
- (135) ケーニヒスザール^{ケー} Königssaal. 現ブラハの街区の「クスブラスラフ Zbraslav」。
- (136) プロコピウス聖者^{プロ} der heilige Procopius. チェコの古伝説に登場する聖人。ボヘミア・モラヴィア各地にこの聖人の名を冠した聖堂がある。同地方によくある男子名プロクス Prox はこの聖人に因む。
- (137) スイスのフラクモン山上のピラトゥス湖^{ピラ} Platussee auf dem Frakmont der Schweiz. ピラトゥスの湖は DSB 一〇で語られているが、ここでは山の名はフラクス・モン(モンス・フラクトゥス) Fraxmont (mons fractus) であり、また湖は山上ではなく山麓にある、とされている。
- (138) ローエ^{ロー} Loh. 「ロー」Loh. 湿地の草原。時として牧草地にも用いられる。しかしながら、湿地に覆われているが下が沼という、ここで紹介されているような土地は、人間にも放牧の家畜にも極めて危険である。草地の見掛けに惑わされてうっかり踏み込み、不幸にして泥沼に嵌まれば、溺死してしまう。
- (139) ナーベ^{ナー} Naabe. 東バイエルン上プファルツを南流するドナウの左の支流ナーブ Naab. 長さ一六五キロ。ベヒシュタインはすぐ後で Naab と綴っているの、そこでは「ナーブ」とした。不統一で困ったものである。
- (140) アレクサンダーバートの町^{アレ} Alexanderbad. 現バイエルン州上フランケン行政区ヴァンジーデル・イム・フィヒテルゲビルゲ郡の町バート・アレクサンダーバート Bad Alexanderbad. 鉱泉浴・泥土浴の保養地。
- (141) コシュート閣下がハンガリアの王冠をそうしたように^コ wie Herr von Kossuths Excellenz die ungarische Kronkron. 「コシュート閣下」とは、一八四八年三月のベシュト蜂起に始まる「ハンガリア革命」の立役者コシュート・ラヨシュ Kossuth Lajos (一八〇二—一九四)を指す。ハンガリア王国下級貴族コシュート家出身の弁護士。ハンガリアの愛国者、政治家、革命家。初代ハン

- (142) ガリア内閣財務大臣。オーストリア・ハプスブルク家のハンガリア王位保持を否定し、ハンガリア独立を宣言するが、オーストリアの反撃に遭い、トルコ、アメリカ、イタリアに亡命、トリノで死去。かつてのハンガリア王国の王冠「マジヤルの聖冠」Magyar Szent Korona = 「聖イシュトヴァーンの冠」(ドイツ語「シユテファンスクローネ」Stephanskronen)は現存する。一八四九年コシユート・ラヨシユは王冠の無い図柄のハンガリアの紋章を定めた(現在は紋章上部に復帰)。
- (143) 公現の祝日^{フェーリス} das Fest Epiphaniäs. 一月六日。
- (144) 黄金の日^{ゲルデ} der goldne Sonntag. クリスマス直前の日曜日。
- (145) 三位一体の祝日^{トリニタテ} Trinitätsfest. 聖霊降臨祭後の最初の主日。
- (146) 南国者^{グロブ} Wale. DSB四七四注参照。ここではドイツへ採鉱者として入ることが多かった先進地帯のヴェネチア人を指す。
- (147) 灰焼き人^{アッペンバレン} Aschenbrenner. 木を燃やして灰を作り、木灰を水に浸し、煮沸してポタシウム(炭酸カリウム)や苛性カリ、カリウムを採取する労務者。ポタシウムは石鹼、ガラス製造の原料とされた。歴史的にはこの他に肥料、洗剤、漂白剤、柔軟剤、ふくらし粉などに用いられた。
- (148) ビシヨーフスグリューン^{フレイヤー} Bischofsgrün. 現バイエルン州上フランケン行政区管区バイロイト郡の自治体。オクセンコプフとシユネーベルクの間、白マインの河谷にある。
- (149) うちの煙突の繋いだ玉葱^{フムケ} die Zwiebelstränge in unserem Schlot. かつて暖かな場所がほとんどなかったドイツの農家では、厳しい冬の寒気が到来すると、台所の竈の煙突の傍に玉葱を繋いだり、束にしてぶら下げたり、積み重ねたりして保存したらしい。なんにも貰えん物乞いは、隠しの麵麴^{ヘン}やえ失くしちゃう^{ハッ} wenn der Bettelmann nichts haben soll, so verliert er das Brod aus der Tasche.
- (150) 盗賊城^{ラウブブルグ} Raubburg. DSB五一二注参照。
- (151) ヴァルトシユタイン^{ワルトシュタイン} Waldstein. 次の注参照。
- (152) ヴァルトシユタイン城^{ワルトシュタイン} der Waldstein. 「赤城」^{ロテ} Rotes Schloß なる異名も持つヴァルトシユタイン城 Waldsteinburg はフィヒテルゲビルゲの大ヴァルトシユタイン山(標高八七七メートル)上にあり、かつてはフィヒテルゲビルゲで最も堅固な城塞だった。一五二三年六月皇帝カール五世の意をも承けたシユヴァーベン同盟^{シュヴァーベン} der Schwäbische Bund は、歩兵一万・騎兵一千から成り、カノン砲百門・銃四十挺を装備した強大な軍勢を動員、盗賊騎士シユバルネック一族が持つ五つの城——ヴァルトシユタイン城はその筆頭——を含むこの地方の「盗賊の巣」^{ラウブネスト} 二十三を攻囲して破壊した。シユバルネック一族によるこの城の再建は行われなかった。その後瓦礫と化した城は忘れ去られていたが、イスパニア継承戦争中(一七〇一—一四)軍の宿营地として再び利用さ

- れ、城門^{トリアハハス}の建物に屋根が葺かれて哨所になった。これに赤い屋根瓦が用いられたので、前記のように「赤い城^{ロトツァンシュロス}」とも称されるようになったのだが、城郭自体は城壁基部を除き現在ほとんど残っていない。
- (153) シュバルネックの殿たち Herren von Sponeck. 上フランケン、上ファルツ、ボヘミアに所領を持っていたフレンキッシュ・フォークトラントの古い貴族一門。下級貴族で騎士階級。数世紀に亘りこの地方を支配した。一族の末裔は一七四四年ヴンジーデルで死んだ。
- (154) Backsteinkäse. 現ベルギーのリンブルフLimburg産チーズ。煉瓦の形をしている。
- (155) 煉瓦乾酪^{バクシュテーク} おめえさま、燻^{ベシ}塩豚^{コルト}の皮みたようにてかてかしてるでねえか Du gleibst so schier wie a Speckschwart'n. 皮付きの豚三枚肉で作る——これが本来の製法——ベーコンの皮は赤色ないし黄色でてらてら光っている。なお、ヨーロッパ人は黄金の色をも「赤い」と感じる。
- (156) だれかに火ん中で金^{ギルデ}鍍^メされたのけえ Host dich öpper im Feuer vergulden lassen? 金を水銀に溶かし込み、これを対象に塗り付け、熱で水銀を蒸発させるのが古代からの金鍍金の方法(現代の「アマルガム法」)。
- (157) ヴァイスドルフ Weißdorf. 現バイエルン州上フランケン行政区ホーフ郡の自治体。ここにはシュバルネック一族に建てられた水城ヴァイスドルフ城があったが、ヴァルトシュタイン城と同じく一五二三年破壊された。一五四三年に防衛設備のない小さなバロック式の館が再建されたが、これは同盟軍に所有の城郭を破壊されたシュバルネック一族による僅かな再建例である。
- (158) それでそもそも妖魔の方があなたの召喚に応えて出て来るのでしょうか kommen denn auch Geister auf Ihr citiren. 原文は上記の通り。しかし現代の版では「Kommen denn auch Geister auf Ihr Zitieren?」である。訳は「あなたの文のそれ(文法的にもこれだ」と意味を成さない)。意地悪な質問者は、妖魔が先生の呪文に強制されて来るのか、そうではなくて現れるのはあちらの意図に過ぎないのか、確かめたのであろうか。
- (159) 泥棒の親方のお伽話 Kindermärchen vom Meistendieb. KHM192. Meistendieb だ^メ Ludwig Bechstein: Deutsches Märchenbuch. Nr.4. Die Probestücke des Meistendiebs. 邦訳。前者には金田一訳「ぶろはうの名人」(『完訳グリム童話集』、岩波文庫)、野村^{タカ}法^{ホウ}訳「泥棒の名人」(『完訳グリム童話集』、ちくま文庫)、後者にはL・ベヒシュタイン編著鈴木満訳「ドイツ昔話集」(一八五七) 試訳(その六) 四「泥棒の親方の認定作品」(『武蔵大学人文学会雑誌』第四十二巻第二号、平成二十二年十二月)がある。
- (160) エップレヒトシュタイン城 Epprechtstein. 現バイエルン州上フランケン行政区ウンジーデル・イム・フィヒテルゲビルゲ郡の同名の山(標高七八二・一メートル)にある山城。十六世紀に破壊され、現在は廃墟。
- (161) ツェル Zell. 現バイエルン州上フランケン行政区ホーフ郡の自治体。

- (162) キルヒェンラミッツ Kirchenlamitz. 現バイエルン州上フランケン行政区ヴァンジーデル・イム・フィヒテルゲビルゲ郡の都市(現人口三千三百余)。ラミッツ河畔に位置し、南西は二キロにエップレヒトシュタイン城がある。
- (163) マインの野 Maingefelde. マイン川が潤す実り豊かな平野。
- (164) ムッゲンドルフ Muggendorf. 現バイエルン州上フランケン行政区フォルヒハイム郡の村。
- (165) ルター博士がコーブルクに滞在し Doktor Luther in Coburg weilte. マルティン・ルターはザクセン選帝侯ヨージハンの庇護の下、コーブルク市を見下ろすコーブルク城Feste Coburg(「フランケンの王冠」Fränkische Kroneとも呼ばれ、いまだにその本質的部分は保存されている立派な城郭)に一五三〇年四月から十月まで滞在した。
- (166) 第三天にまで zum dritten Himmel. 「第三天」der dritte Himmelとは、宗教的宇宙論における天界の区分の一つで、幾つかの伝承では神の御座とされ、最高の天。天界を七層に分けた場合の「第七天」に相当。「第七天」論に従えば、「第三天」は楽園の低い層となる。
- (167) 汝ら黙せよ此日は聖きぞかし seid stille, denn der Tag ist heilig. 旧約聖書ネヘミア記八章十一節。
- (168) 洞窟山 der hohle Berg. 高十字とも呼ばれる。ムッゲンドルフとエンゲルハルトツベルクの間にある洞窟の多い山(標高五二二・六メートル)。オスヴァルト洞窟Oswalthöhle、ヴァンダース洞窟Wundershöhle、ドクトラス洞窟Doktorshöhle、ヴィッツェン洞窟Witzenhöhleなど有名。
- (169) かつては空つば穴と呼ばれたが、今ではある小説に因んでオスヴァルトの洞窟といわれることも少なくない sonst das hohle Loch genannt, jetzt aber nach einem Romane bisweilen auch Oswaldshöhle geheißen. 原文は上記の通り。ここでは洞窟の名が山の名になつてしまふ。前掲注に記したように、洞窟山に幾つもの洞窟があるのである。オスヴァルトツヘーレにせよ、とにかくこれは山の名ではない。「ある小説」とは騎士物語「ハインリヒ・フォン・ナイデック」Heinrich von Neideck。オスヴァルトなる隠者がここに住んでいたことになっている。
- (170) ドラマイゼル城 Drameisel. ドラマウス城Dramaus. ムッゲンドルフ近く、ヴィーゼント河谷を見下ろす位置にあったとされるが、実際に存在したかどうか今日まで議論の対象となつてゐる。
- (171) エッペリン・フォン・ガイリンゲン Eppelin von Gailingen. エッペライン・フォン・ガイリンゲンEppelin von Gailingen、本名アポロニウスApollonius・フォン・ガイリンゲン(一三三〇頃—八二)。フランケンの盗賊騎士で、ニュルンベルク周辺の交易路を不安に陥れた。騎士の城はニュルンベルク市に組織された軍兵によつて一二七二年破却された。騎士は一旦敵手に落ちるのを免れたが、数日後フォルヒハイムで逮捕、更にニュルンベルクへ連行されて、絞首刑の判決を受けた。しかしながらうまくと逃亡に

成功(伝説となる)。一三八一年居酒屋で一味徒党と酒盛りをしているところをニュルンベルク市に搜索を委ねられていた傭兵部隊の一つに見つかり、逮捕され、同年五月十五日、上ブファルツのノイマルクトで車裂きの刑に処せられた。ニュルンベルク市民がこの街道強盗の逮捕・処刑に要した金額はほぼグルデン金貨一千枚に達したとか。彼に関する史実の文献は乏しい。十九世紀ドイツロマン派によりフランケン人のロビン・フッド的存在にまつり上げられた。

(172) かのヴィッティヒがヴィザール川を越えたように *wie der Wirtich über die Wizar setzte*. ヴィッティヒ (ヴィテゲ Witege その他色色) はドイツの伝説や北欧の物語詩に登場する英雄。その乗騎は名馬で聞こえた牡馬 *Schimmel* Schimming。

(173) 騎馬で打ち立つニュルンベルクの仇、／ドラマウスのエッペラ・ガイラ。 *Da reit der Nürnberger Feind aus, / Eppela Gaia von Dramaus*. 原文は上記の通り。

(174) ドラマウスのエッペラ・ガイラ、／いつも十四人連れ、騎馬で行く。 *Eppela Gaia von Dramaus / Reitt allzeit zu vierzehnt aus*. 原文は上記の通り。

(175) 十四聖人 *Vierzehnheiligen*. 十四救難聖人のこと。後掲注参照。

(176) ニュルンベルク衆にや吊しはできん。／捕まえとりやあ別だがね。 *Die Nürnberger henken keinen, / Sie hätten ihn denn vor!* 原文は上記の通り。

(177) 物見塔 *Luginsland*. 南ドイツで「物見塔」「望楼」を意味する古い言葉。城塞の幾つかの塔ないし最も高い塔がしばしばこう呼ばれた。ニュルンベルク城の場合、その最も高い塔(一二七七年建築)。

(178) 車陣 *Wagenburg*. 輜重車輛などを円陣に組んで防壁としたもの。とりわけ騎兵の攻撃に対処するのに適していた。ここでは逆に攻囲用にしたわけ。

(179) ポストバウアー *Postbauer*. 現バイエルン州上ブファルツ行政区ノイマルクト・イン・デア・上ブファルツ郡ポストバウアー＝ヘンク。

(180) ランクハイム修道院 *Stift Langheim*. バンベルク司教領に属するリヒテンフェルスのシトー会派修道院。現バイエルン州上フランケン行政区にあつた。一三三二／三三年に創立されたが、一八〇三年解散。

(181) リヒテンフェルス *Lichtenfels*. 現バイエルン州上フランケン行政区リヒテンフェルス郡の中心にして郡庁所在地(現人口三千余)。

(182) バンベルク *Bamberg*. 現バイエルン州上フランケン行政区バンベルク郡郡庁所在地(現人口七万余)。旧市街の町並みは美しく保存されている。

- (183) 十四救難聖人 die vierzehn heiligen Nothelfer. 病氣その他危難に遭った時、その名を呼んで縋れば救いの手を差し伸べてくれる十四人の聖者たち。ただし、守護対象は聖人によって専門が決まっている。名はこの伝説の結びに出る。
- (184) 皇帝フリードリヒ三世 Kaiser Friedrich III. ドイツ王（在位一四四〇—九三）・神聖ローマ皇帝（在位一四五二—九三）。ハプスブルク家。弱小領主、貧乏、臆病、優柔不断、とさんさんに貶されたにも関わらず、極めて長期に亘りなんとか帝権を維持し続け、敵対者は全て都合良く死に、ハプスブルク家の帝位世襲を成就した。嗣子は「最後の騎士」der letzte Ritterと謳われ、ハプスブルク家を強大にした神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世 Maximilian I. である。
- (185) アルブレヒト・デューラー Albrecht Dürer. 小アルブレヒト・デューラー Albrecht Dürer der Jüngere（一四七一一—一五二八）。父——ハンガリアからニュルンベルクに移住して来た金細工師——である大アルブレヒト・デューラー Albrecht Dürer der Ältere（一二二七頃—一五〇二頃）と区別してこう呼ばれる。ニュルンベルクに生まれ、死す。画家、印刷芸術家、数学者、芸術理論家。その絵画、スケッチ、銅版画、木版画でルネサンス期の傑出した代表者の一人とされる。なお、デューラーが十四救難聖人巡礼教会に参詣したのは一五一九年ではなく一五二〇年七月十三日（デューラー著前川誠郎訳『ネーデルラント旅日記』、岩波文庫、岩波書店、二〇〇七年、脚注4に拠る）のことである。約一年に亘るネーデルラントへの旅の門出に当たり十四救難聖人（おそらくはとりわけ旅人の守護聖人クリストフォルス）の加護を祈念するためであろう。
- (186) メラン伯爵家 Grafen von Meran. 未詳。十二世紀シタウフェン家の政策により生み出されたメラン公爵領 Herzogtum Meranien の系統であろうか。
- (187) シャウムブルク家 Schaumburg. 広く枝分かれしているフランケン^{フランク}の貴族の家系。一族発祥のシャウムブルク城はフランケン色が濃くバイエルンとの境に接する南部テューリンゲン（この地域にはフランク族が多く定住した）にある。シャウムブルク一門はかつてフランケンで大いに勢力を振るったが、男系は二〇〇二年に絶えた。
- (188) シャルカウ Schalkau. 現テューリンゲン州ゾンネベルク郡の都市。近くにシャウムブルク城の遺構（城壁の一部）がある。城は十二世紀に築かれたもので、三十年戦争時代に破壊された。
- (189) シェスリッツ Scheßlitz. 現バイエルン州上フランケン行政区バンベルク郡の都市（現人口約七千百余）。
- (190) アーホルン村 Ahorn. 現バイエルン州上フランケン行政区コーブルク郡の都市コーブルク（現人口四万余）の南に接する自治体（現人口四千余）。名の由来はかつてこの地方にあった楓^{アールン}の林から。
- (191) この男、聖人がたや天国の蠟燭^{ろうそく}を目にしたことはなかった der sah keine Heiligen und Himmelskerzen. ベヒシュタインは、この羊飼いはDSB七〇七に登場するフランケンタール^{フランク}の見霊者のように主イエスの恩寵を忝なくする存在ではなかった、と言いたい

だけのこと。

(192)

嵐魔女 ワザーイヘー

Wetterhexe

暴風雨、電、不意の寒気など悪天候を呼び出す魔女。そのせいで近隣の果樹や畑の作物は甚大な被害を蒙る。尤も、こんな悪さを働いたからといって、当の魔女には何の利益にもならないのだが……。

魔女迫害は集団的ヒステリーによる社会現象だった、と考えられるので、不条理な理屈がまかり通ったのである。

(193)

この樹に榮譽という名を与えた

gaben sie ihm den Namen Ehre. „Ahorn“ ist Gêrmanisch, „Ähre“ (穂) の意だった由。音が „Ehre“

(榮譽) に似通う。

結びに一言

長年ご交誼を賜った大野淳一教授の記念号にこの拙訳を捧げよう存じます。温雅洒脱かつ極めて博識な大野さんは、武蔵大学在職当時、公私に亘り接触の少なくなかったべくとって大層愉しいお仲間でした。記念号への投稿は先生ご所属の学科関係者が多い道理で、畑違いの当方は遠慮すべきだったのですが、あえてしやしり出したのは、殊更こうした献辞を記したかったからなのが正直なところ。尤も大野さんのご専門中のご専門である夏目漱石にいくらかでも縁のある仕事の方がより適切だったことは申すまでもありません。さはさりながら「雑魚ざこの魚交とじじり」とやらを地で行ったものは昔むかしに書いてしまい、以来恰好の題材も思い当たらず終い。「『蛇飯』考」なる質量共に文字通りの小論なのですが、幸い『新編夏目漱石研究叢書1』（近代文芸社、一九九三年）に収録されております。ええ、『吾輩は猫である』の中で迷亭が披露しているあの「蛇飯」です。それも併せて先生にご流覧願うことにして、ご勘弁戴くかな。へい、おあとがよろしいようで。

